



羣書一覽

二





群書一覽卷之二

記録類

禮儀類典、写本

五百十卷 西山公御撰

古今諸家記録数百部の中、朝廷の禮儀、あづまの類聚せし
 きたきしひ別圖、三卷、附せし。○洋山方面、武備文事、あづ
 ぶか、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの
 の履歴、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、
 即ち、章考館、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、
 ねお、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの
 き、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの
 の餘年、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、
 くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの
 恒例、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、
 國忌、あづまの史傳、くさし、あづまの史傳、くさし、あづまの



群書一覽

和書部二

たゞし總裁^{ツカサシ}の秋^{アキ}に編纂^{センザン}すべしとせしむるに自^ミ子^コ内^{ウチ}實^ミの秋^{アキ}に編纂^{センザン}すべしとせしむるに自^ミ子^コ内^{ウチ}實^ミ

李部王記 武部卿重明親王

法住寺相國記 為光公

小右記 小野宮右大臣實資公

土記 或土右記土御右大臣師房公

大宮右相府記 俊家公

京極園白記 師実公

平定家朝臣記

後二條園白記 師通公

江記 中納言匡房公

大外記師平記 時範朝臣記

法性寺園白記

八條相國記 実行公

九曆 或九記 九條右大臣師補公

法成寺攝政記 道長公

權記 權大納言行長卿

左經記 參議左大臣経村公

春記 春入大夫實房公

水左記 堀河大夫俊房公

師記 大納言経信公

久我相國記 雅実公

知足院園白記 忠実公

中右記 中侍右大臣宗惠公

大府記 大藏右房公

永昌記 土藏右房公

長秋記 大皇太后大夫師叶公

台記 宇治左大臣兼長公

宇槐雜抄 記者同上

実親朝臣記 朝経記

中納言朝隆卿記 中納言顯長卿記

玉海 月輪抄の義実公

愚昧記 三条左大臣実房公

山槐記 中山内大臣右親公

右大臣辨重方朝臣記

参議俊経卿次第

心記 樋口大納言定経公

殿記 大外記頼業記

宮槐記 野内内府公俊公

中納言経親卿記

中内記 内大臣宗忠

同別記

知信朝臣記 三條内府記公

大外記師元記 大納言公通卿記

中納言顯時卿記

同別記

中納言次長卿記

中納言雅頼卿次第

兵範記 兵部右大臣信範公

吉記 吉田大納言経房公

顯廣王記 中納言長方卿記

仲資王記

猪隈園白記 家実公

玉葉 光明寺園白道公

長記 一條中納言長善

大外記師尚記 大外記良業記

中納言定高卿記 德大寺相國記

大外記師季記 業資王記

平戶記 長部以後

後中記 兼室中納言

後三條內相府記 公親公

中納言忠高卿記 陽龍記 滋野井中納言忠高

水旱宸記 北條美成

妙槐記 妙老寺內大臣美成

後西園寺相國記 實善公

中納言宗雅卿記 大納言經任卿記

仁部記 長部以資宣

吉續記 吉田大納言經任

中納言定嗣卿記 大納言實宣卿記

明月記 兼中納言定家

自曆記 吉田宰相實任

岡屋閑白記 中納言賴資卿記

中納言家光卿記

師季卿記 今出川相國記 兼

中納言為經卿記 大納言資季卿記

中納言經光卿記

山階左相府記 實雄公

大納言顯賴卿記

憲言記 中納言經俊卿記

右大辨高輔朝臣記

竹林院左相府記 公衡公

後山本左相府記 公善公

後稱念院閑白記 冬平公

伏見院御記 月藏坊僧都室田記

大外記師古記 大外記師右記

參議雅俊卿記 今出河內相府記 實衡公

萬一記 萬里小路一位宣房

八條內相府記 公秀公

大納言公敏卿記 秀長朝臣記

盛秀朝臣記 大外記良枝記

後愚昧記 在押小路內大臣忠嗣

松重記 松名大納言忠嗣

大外記師茂記 久世相國記 具通公

大外記賴光記 成恩寺閑白記 經嗣公

大納言公宣卿三節會次第

後成恩寺閑白三節會次第 建良

中院內相府記 兼

定衡朝臣記 業顯王記

吉槐記 吉田內大臣宣房

繼塵記 中納言實任

園大曆 中國相國公賢公

宮內卿長基卿記 野宮內相府記 公清

大納言長光卿記 後山階內府記 實善公

同別記

重綱記

左大史匡遠記

大納言為遠卿記 量實記

後野宮相國記

後瑞雲院內府記 兼宣公

建內記 建聖院內府時房公

觀音寺相國記 公名公

薩戒記 中山大納言定親

同別記 同抄出

東山左相府記 實忠公

二條大納言記 時通公

兼治宿祢記

後竹林院左相府記 實遠公

大納言益長卿記 資益王記

宗賢卿記 權大外記康高

十輪院內相府記 通方公

中納言有俊卿記 大納言親長卿記

宣親朝臣記

慈眼院園白節會次第 改基公

大納言宜胤卿記 忠富王記

後妙華寺園白即會次第 冬良公

得生院右相府記 公友公

大納言元長卿記 菅別記 甘露寺大納言和長

後觀音寺左相府記 實宣公

二水記 實庵中納言隆康

三光院內相府記 實澄公

光恩院儀同記 孝親公

後淨明珠院撰政記 康道公

百鍊鈔 已下作者不詳

天慶二年記 已下記者未詳并次第物等畧之

系館のしもの 總裁一人考勘十五人書字二十八人合十人出納

四人檢察三人隔日二辰のま漏り未のま刻の退く但書體抄

仙洞八奏後一思ハ群の批注をけたり人ある四方拜流るる

智之節會の觀行幸二ふまの答に於て今出川の内府

のしものまをせたり仙洞も禮儀類典

歌号をたせりし書目より採集秘記新儀式は依元所

記深心院園白記後深心院園白記を借下これより官庫に足之

ふに録紙めせたりおほくかへんも秘書紙記をの

一館よりめさせたりハカハ傳のおぼりありありおこり

京河田舎よりたりたり名山靈區の奥まで探りていさごり

たのひくくられし秘紙より牛ふけりしむらり

かりたりぬるる○宝永七年庚寅八月權中納言從三位細條君

序のしもの凡例あり

第一巻より第百十四巻まで 年中行事

第百十五巻より第百八十四巻までの間 内侍所御神樂 祈

雨止雨臨時御八講 御謀位 御即位 大嘗會 八十島祭
 行幸 遷幸 遷宮 御元服 御讀書始 立后 御産 廿
 御入内 改元 天文密奏 講書 諸宣言 任大臣 上表
 御幸 御薙染 拜賀 著陣 春日詣 回祿 追討使 配
 流 御國忌 其餘恒例儀 故実等 河のせり
 第四百八十五卷より 第四百九十九卷まで 詩御會
 第四百九十卷より 第四百九十九卷まで 歌御會
 第四百九十七卷より 第五百十卷まで 音楽 宴遊 御賀 諫園
 等の御載り

群書類鑑 写本

八十卷

撰者つぎりくなくす 祭義の部五本に閱了此中より引くもの
 書 延喜式 吏部之記 九記 外記 貞信公御記 小一條記
 北山抄 春記 中右記 長秋記等 〇書體禮儀類典又
 類しりも採用すふの書の廣博なりハ彼書及ふとす

日記記 写本

二百二十卷

村上天皇の御時より以來各家代々記録し九条道長公より兼実
 公及ぶまでこれに記せ

諸家名記 写本

一卷

李部王記以下諸家記録の目録なり下作者に附す此書予が園
 すふの仁和尚書目録の末に附しり 諸家録七十二部に載

李部王記類聚抄 写本

兼明親王

李部王記中七八延喜帝皇式部卿兼明親王に記録なり古より自
 らも巻ねばあらず今に 記すものなるに 諸家類聚抄を
 何人の撰なりとす 彼記の文の諸書に散見すもの
 形聚しり 卷首重損あり 孝三行目 延長四年十二月廿八
 日のゆめより 同六月の月十月の月 又八月の月
 十月の月 次々天慶二年三月十月の月 口ふのゆめ 此中

經ツク信卿記写本 七卷
雀院の長曆四のより後迄の永のりまのゆ記せり

大納言信信の記し一名帥記と号す太宰権帥のゆ記せり
は冷泉院の治曆四のより堀河院の寛治二のりまで二十二年の月々のと
記せり

水左記写本 七卷 源俊房公

土御門左大臣の記録之源姓のゆ記せり水左の二字は名をす

第一卷 白河院の承保四年七月より才三卷同四年十二月より

第四卷 承暦五年七月より才六卷同五年十二月より 此卷の奥書

よ 此一冊左近中務通清朝臣筆也 元禄十年七月三日權大納言

源

第七卷 承保四年正月二月五月六月十一月十二月 承暦二年正月二

月十二月 同三年正月二月四月五月七月十二月 同四年正月より

六月まで 同五年八月五月十月同四年七月八月同八月十月十二月

同五年 永保元年正月より四月まで 六月十月より十二月まで 承保二
年正月四月七月十月十一月 同三年正月二月八月 同四年正月七月八
月 應徳二年正月六月 同五年十一月十二月 此一卷有鐫刻
奥書云 此一冊右近中将具統朝臣筆也 元禄十年七月三日權大納言
後二條関白師通公記写本 六卷

白河院の應徳三年七月より堀河院の寛治七年六月までの記録

卷之一 應徳三年七月より十二月まで

卷之二 寛治二年七月より十二月まで

卷之三 同五年正月より二月まで

卷之四 同六年正月より二月まで

卷之五 同七年正月より二月まで

卷之六 同八年四月より六月まで

此記毎日曆の中段下段とあり 廿五日 庚戌凶會 廿九日 甲寅
凶會 欠日 二日 丙戌 復 往亡 廿九日 癸丑 代 十八日 庚寅 大福 十

九日辛卯狼藉 廿四日丙申瀧門復 十日丙戌歲下食 十六日壬辰
五墓 廿七日癸卯九坂血忌復 等なり

中右記 写本 七十二卷 藤原宗忠公

中序右大内記録し因く中右記より号す堀河内院の寛治元年正月
より崇徳院の保延元年十二月より号す白河内院の寛治元年正月
十二卷より号す今世より号す白河内院の寛治元年正月
より号す此書諸の故実の考證なりきりし書始より
より号す此の圖叙なりし九月十三夜の明月八月十五夜より号す
より号す此の記録なりし

因屋関白記 写本 三卷

関白兼經公の記録なり後一条院の長元二年より記せり

水日記 写本 十一卷 權大夫師時卿
皇后太子持大夫師時の記録し今堀内院の天永二年四月より崇徳院の
保延二年より記せり

永昌記 写本 十二卷 参議為隆卿
一名宰記と号す卷首より永昌御記為隆卿より号す毎卷目錄を
堀内院の長治二年より崇徳院の大治四年まで二十五卷のありの記
録なり ○才十卷奥方より天治元年夏御記永昌 借用右兵衛權
佐教秀写留し件写本字之狼戾行之及倒不審多端後覽者可
得其意也相傳本先年焼失愚老惡筆近年弥倦然而為子孫
強而相企者也文安元年九月廿五日權大納言藤原判

八條相國記 写本 一卷 八條实行公
古き書目より卷ねかき今なすより殘缺あり天治
元年十月のふ一卷なり

長秋記 写本 十卷 皇太后宮權大夫師時卿
后宮の唐名が長秋宮より号す以て名づけられたる古書目より卷ね
かき今なすより十卷より才一巻のありて殿後より
より号す今なすより才二巻のありて天永二年より

治元年(承元)十月廿九日又終焉

三長記 写本 九卷 大納言長兼卿

三條長兼卿の記録し因く三長記と号すは多々院の建久七
年(治元)の事也記せり

殿記 写本 八卷 藤原良経公

或ハ殿曆ノ号ナ種々ニ部類相分ち別ニ建仁四年の記附す〇一
條禪院の挑華葉葉當家相傳心記の事也殿御記一合は系は拾

自筆の事也記せり

猪隈関白記 写本 四卷 関白家實公

猪隈関白の事也作す上院の建仁元年より承元二年までの

台記 写本

二十卷 宇治関白頼長公

此長公宇治悪左府と稱す此記頼長公生年廿二歳近衛院の康
治元年壬戌正月より二十六年甲午二月四月まで十四年間の

日記なり此中久安二年正月より九月まで関白年十二月關又仁

平元年四月より十二月まで關白二年卷首關白の事也正月より六

月まで關白十月より十二月まで關白第二十卷久安六年の記

ハ才十卷より向一不審十九卷以下ハ保元の乱より一記録

乃を了す事也此ハ才學の時ハ超越せられ信

西院の事也此ハ才學の時ハ超越せられ信

毎年漢の事也此ハ才學の時ハ超越せられ信

ハ才學の時ハ超越せられ信

ハ才學の時ハ超越せられ信

ハ才學の時ハ超越せられ信

ハ才學の時ハ超越せられ信

ハ才學の時ハ超越せられ信

台記別記 写本

八卷 七本 同上

台記のちりふれしものの中諸の儀式等のりりしもの日記よ
 のすしりしものふれしもの
 第一卷 長承四年二月賴長任大將記 康治元年十一月十六日大嘗
 會 同二年正月十八日賭
 第二卷 二月廿七日知蓮院禪院七十賀 四月朔日官政 十月二日官
 政 十二月十二日讀書始
 第三卷 第四卷 婚記才六つもの久安四年七月より十二月廿四日まで
 のすしりしもの
 第五卷 久安六年十月より仁平元年八月まで 諸春日社記
 第六卷 仁平元年花隆長元服記
 第七卷 仁平二年請春日記
 第八卷 久安二年四月請賀成記
 右台記十九冊後二冊合廿冊別記七冊全部廿七冊以て
 本書写移考平時享保丙辰初夏

人車記 写本

二十五卷 兵部卿信範卿

此書一ノ兵範記と号す官名一ノ一字ありしもの
 人車の号ハ実名の偏似しもの信範の他言入るる編す
 第一卷 久安五年十月十五日 第二卷 仁平二年十一月十二日
 第三卷 同二年正月十五日 第四卷 同二年八月より十二月まで
 第五卷 久寿二年 保元二年 信範の十時正五位下四十五歳正月より二月まで
 第六卷 保元二年四月より七月 第七卷 同二年正月より二月まで
 第八九十月の卷 仁安元年九月より十二月まで
 第十一卷 同二年四月より六月まで 但し六月の末
 第十二卷 同三年正月 第十四卷 同七年七月
 第十五卷より第二十一卷まで 同九年九月より十二月まで
 第二十二卷 嘉應元年二月 第二十三四五卷 同六年六月より十月まで
 此記録の末に治承記一紙を附す、九ハ治承四年二月廿日持帝の時
 記せり其美書と云 右信範の治承記以桃年殿下兼一之本写本

東宮權大夫 民部卿 修理大夫 等所より又國師不系の例

等所のせり。○奥書云此一冊書写事延徳八年九月十六日自禁裏
被仰下候間為后一本写留者也彼本故葉室大納言入道 俗名
宗豊後頼時 筆跡也不審之所数多或加了簡或随勘出直改書

玉

又延徳元年九月廿六日添筆の奥出 按察使藤原親長より
葉 写本 二十九卷 光明峯寺攝政道家公

挑筆葉葉云々當家相傳正記 玉葉七合 光明峯寺禪岡自筆
記 第一卷 土御門院の承元二年二月より 第二十九卷

四條院の仁治二年二月同之年三月より 第三十九卷
東書松入より

明

月記 写本 九十六卷 京極中納言定家卿

初の名ハ照光記といひ明月記といひ 彼卿の毎月
記と去め元久の比住吉赤籠の時汝月明かりと眞の靈夢と

感 けりし家風よりなりぬ明日記何ぞとて
て作りし身よりなりぬのさしむるなり ○此記巻初め

古目錄の載り下東見記より三十三巻より今世流布す
五十餘巻ありいハ三十餘巻の本等とす 岡す

明

月記和歌部類 写本 一卷

巻首の歌道事 彼記の中の和歌ありありの
と一條様岡兼良公の松と たりしもの

山

楓記 写本 十卷 藤原忠親公

又連幸記と号し又貴嶺記と号す中山内大臣を親らの記
し平合戦の比のやねとせり

平

戸記 写本 十卷 平經高卿

民部卿経^{ツキカ}の日記録なり民部卿の唐名^{カラナ}部^コの日記録なり平戸
記と名^ナの四條院の延應二年正月より後醍醐院の寛元二年十二月迄
の日記録なり

仁部記 写本

五卷 權中納言資宣卿

日野資宣の日記録なり日曆の上段中取とあり

第一卷 建長八年五月 第二卷 弘長元年七月

第三卷 弘長二年正月 第四卷 文永五年二月

第五卷 弘安二年四月 以上各残缺なり○此記者資宣の資

菅見記 写本

五卷 竹林院左大臣公衡公

公衡公は西園寺太政大臣実永公の男なりは先帝の外祖なり

第一卷 此卷は実永公の日記なり公衡公の日記なり

二月二日より二月廿日なり

第二卷 公衡公より六代のは慶春院右大臣実永公の記なり位権大納
言公名卿等の記なり稱光院の長元年六月七月九月の日記
なり

第三卷 公名公記なり公名公は実永公の男なり観音寺太
政大臣と稱す永亨二年正月六月七月の日記なり

第四卷 永亨三年正月一日より三月廿日なり

第五卷 南都大佛縁起なり

萬里小路一位宣房の日記なり萬一記なり此記も今傳
はる残缺なり

方即位女叙位太子御襟等の日記なり○契書なる明應九年
春正月廿五日抄出なり大学院四位下行の納言兼侍從文章
博士六内記菅原朝臣判又云于時文龜元年五月廿七日書なり
借用東坊城和長つ者也藏人右中辨友系判又云此二冊

大納言宣房卿

一巻

大納言宣房卿

一巻

大納言宣房卿

一巻

大納言宣房卿

一巻

右大辨宰相賢房サイシヤウ以東坊城和長ホウシヤウカスガの書シヤウ字シヤウ其シヤウ已シヤウ奥十枚計
虫損之間重坊城シヤウ令借用シヤウ于時永正十五シヤウ十月十九日
左中辨永花押

吉續記 写本

二十三卷 吉田大納言經長卿

第一卷 文永四年六月の事 第二卷 同年四月五月六月の事
第三卷 才二卷と同一月の事 第四卷 同七月より九月までの事
第五卷 文永五年五月六月 第六卷 同七月より九月までの事
第七卷 文永五年五月六月 第八卷 同七月より九月までの事

三 槐抄 写本

二卷

此抄自槐門三家之説故の十字に下虫損と云ふ事
正安二年公茂元亨二年実忠授始権中納言の事
治承二年正月廿日見合本書了裏書に勅物等摘要
粗注付也 又云文治五年二月一日見了所加裏書勅物等左

幕下花押 又云元仁二年正月披見之間軸本虫喰損修覆シヤウ沙珠シヤウ
○按ずる此書何人の記すらんか
家の系圖より公茂ハ三條実重公の息
後一位元亨四年正月九日薨す其男実忠ハ三條一号す康永二年
内大臣貞和と云ふ正月四日薨す実重公の男なり

公清公記 写本

一卷

内大臣公清公

卷首より貞和六年具注曆日庚寅歳 正月小建寅 一日丁巳土平と記
此中二車の圖ありて後檢かき五月までの事なり
右一冊者不慮取求之間令備工密と書か之校合たり延宝第二
首夏初二内大臣右大将 ○按ずる公清公と云ふ事
貞和二年内大臣右一任延久五年六月薨す其の野シヤウ号す
太曆 写本 二十三卷 太政大臣公賢公
一名園太記と号す中國太政大臣公賢公の記録なり以てか名

群書一覽 和書部二

二卷 七八九の巻 十十一と四巻 十二十四十五
と五巻 十六十七十八の巻 十九二十の巻 二十一合
冊七本なり 古く書目ハ二十五巻 又薩戒別記薩戒秘抄
等の書目あり

康富記 写本

二十卷

權大外証中原康富の記録あり 應永より享禄までの日記ナリ 二
十巻も残缺あり ○日記の中享禄四年正月九日のあり 今曉室町
殿姫君誕生也 御袋大館兵庫頭妹也 云々

宣胤卿記 写本

二十二卷

大納言宣胤の記録あり 文明長亨延徳明應文龜の比の日記ナリ
○此書の中文明十二年十月二十日より十二月十四日まで 禁裏に於
て兼俱の日記紀序法義のあり 其儀りのあり 云々
二 水記 写本 十卷 鷲尾中納言隆康卿
又一止記と号す 柏原院の文也 四のあり 云々

元長卿記 写本

十卷

甘露寺大納言元長卿の記録あり 柏原院の永正二のあり 大永五
年まであり 日記ナリ

三光院内府記 写本

一卷

西三條實澄公

繪首の勅書のあり 女房奉書のあり ねまると目のあり 烏帽子のあり
束帯のあり 衣服のあり 其餘種々の日記ナリ ○奥書云々 此一冊後三
光院内府被書送具房朝臣北島者也 以中院入道也 足軒自筆本 騰
寫之 右清閑寺後一位共房の奥書也 又之拜借秘書寫之 不可出
櫃中者也 御厨子所預紀宗恒

百鍊鈔 写本

十七卷

此書の記者ハ 大治承安文曆の比のあり 云々
○嘉永二年正月十五日 大理定房の本書寫技合ニ 負顯 ○每卷金澤文
庫の墨印あり ○金澤文庫のあり 金澤越後守平負顯ハ 北条

越後守実時が孫越後守顕時が子なり其は武藏國金沢より住す其家号は金澤といふ禰名寺に中より支庫に傳へりて和漢の群書ありし金澤文庫といふ印は押し儒書は墨印は用ひ佛書は朱印は用ひるは舊跡今も傳へりて下も藏書は元弘の兵乱よりせりて存するもの二百餘部といふ

有職類

金玉堂中抄 写本

一卷

中原^{二年}草任

律に未書なり罪條事より五刑のゆゑより七十一條とあり律令ならぬは律疏と引く今案に格を了るる○本朝法令の書このこと唐の刑書の目録に律令格式の四科あり養老二年は贈太政大臣不比等勅にのりて作らぬは養老律よりは大宝元年は撰せしめしと大宝律より共のこりて今付しるは目録ハ唐律に令の目録あり

名例第一	衛禁第二	職制第三	戶婚第四
厩庫第五	擅興第六	賊盜第七	闘訟第八
詐僞第九	雜律第十	捕亡第十一	斷獄第十二

○按ずるは律の未書も昔は義解集解疏附釋問答おもりのりて多しとせしめしは今令の堂中ありしせし残りたり

以上撰者十二人カケル目録ハ

第一 官位令 職員令 後宮職員令 東宮職員令 家令職員令

第二 神祇令 僧尼令 戸令

第三 田令 賦役令 学令

第四 選叙令 繼嗣令 考課令 禄令

第五 官衛令 軍防令 第六 儀制令 衣服令 宮繼令

第七 公式令 第九 假寧令 喪葬令 関市令 捕亡令 第八 倉庫令 厩牧令 医疾令

第十 獄令 雜令 ○今これ刑が慶安三年產生卷林鶴序に

令 集解 写本 好中何以く校心す

後教義解のけしめす 二十卷 惟宗直本

令 私考 写本 古書の引證は多く集解に依り

作者詳かす第一卷の中官位令より職員令の軍團まで

令 二辨 写本 一卷 荷田在満

今これ令ハ大宝令より二辨一巻老より律令削除を定め

て更よこれか制すより二辨一巻の令を巻ね巻老よ

類聚三代格 写本 二十二卷 貞安六卷

林の中代より下知の條よりけしめすより損益

類聚三代格とすより今なるすより

弘仁格 十卷 大納言藤原冬嗣等奉勅撰

真字序より推古天皇十二年より上宮太子親憲法十七條制作

に至りて令廿二卷か制す世人のよより近江朝廷の令より

文武天皇の大正元年、建く有るの如く不比等勅に於て律
 二卷令十一卷に撰り養老二年復旧し大凡不比等勅に於て律
 て更は律令と撰りて之の十卷す今世の律令と
 此の律令は方今律令類は判條と撰りて之も格式といふ編輯
 とくも一すれは此の律令類は判條と撰りて之も格式といふ編輯
 大凡有るの如く内府に常陸守菅野の如く真直等と撰りて之
 撰定せしむ草創の如く成す所の過密と撰りて之も格式といふ編輯
 先づの如く遂に観るに於て論言の如く撰りて之も格式といふ編輯
 撰りて之も格式といふ編輯
 人若るの如く三守格の如く常主中丞宿祿敏久等と撰りて之も格式といふ編輯
 上尊い下時宜の如く官府の如く撰りて之も格式といふ編輯
 略し用捨の如く審察の如く撰りて之も格式といふ編輯
 年と起りて下弘仁十年と起りて之も格式といふ編輯
 公の序は本朝文粹卷之八の如く撰りて之も格式といふ編輯

貞觀格 十二卷 大納言藤原氏宗等奉勅撰
 序の如く聖德太子の如く四月廿一日格十卷と施行す今時五代の
 歴年六旬の如く文質暗と撰りて之も格式といふ編輯
 片長相等の如く詔の如く舊格と撰りて之も格式といふ編輯
 成規の如く詔の如く撰りて之も格式といふ編輯
 年名大江の如く音人菅原の如く是善上毛野の如く永世起の如く
 守雄南淵朝臣興世大春日朝臣安永布瑠宿祿道永山田宿
 祿弘宗等と撰りて之も格式といふ編輯
 成規の如く詔の如く撰りて之も格式といふ編輯
 司格と撰りて之も格式といふ編輯
 卷の如く撰りて之も格式といふ編輯

群書一覽 和書部二

延喜格

十一卷

左大臣藤原時平等奉勅撰

序より弘仁格十卷自觀格十二卷聖王其論言格降一賢其
 筆削所施一舊章と其臺閣を授て制制の詔命を擇ふ而
 制格以來の所歴を漸くしていかに代の中地張あは
 変り或は一の計上抑揚互に珠をあはひに中地同く未
 定國系系のれ有徳平のれ惟範紀のれ長谷雄系系のれ管
 根系系のれ興範之善のれ清貫大藏のれ善行系系のれ
 道明之統宿祿理平惟宗のれ善行善道のれ有行のれ世連
 諸統等之詔一前條を憲章して此典を綜緝して其統
 十のの對て延喜格七のの友を以てら流一れ知れれ
 子皆舊目之依て新音心知くよきよきかありの條貫綜錯
 して區分仰かきよきよきものを雜令之准しててれ
 雜格ノ号ナ勅一十卷ノ下延喜格一ノ別ノ延喜格對

格二卷併合せて十有二卷ノ下ニ延喜格の目錄ハ

- 卷第一 神祇中務 卷第二 式部上
- 卷第三 式部下 卷第四 治部上
- 卷第五 治部下 卷第六 民部上
- 卷第七 民部下 卷第八 兵部
- 卷第九 刑部 大藏 宮内 彈正 京職
- 卷第十 雜格 臨時格卷上 臨時格卷下
- 類聚三代格殘缺六卷目錄
- 卷第一 序事 弘仁格式序 自觀格序 延喜格序
- 神社事 神封并租地子事 祭并幣事 神叙位并訖宣事
- 齋王事 神官司神土祿宜戶座猿女等附出事
- 科祓事 神郡雜事 神社公文事
- 卷第二 佛事下 國分寺事 定額寺事
- 僧綱員位階并僧位階事 諸國講讀師事

又上東陽明待賢郁芳美福朱雀皇嘉談天
薄壁殿富上西安嘉偉賢聖智の十四門の図り

第五十三 雜田事

第五十四 交替雜事

溝池堰堤事

第六十 交替雜事二十

定戸等第事 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

第六十一 雜事

西宮抄 寫本 十六卷 左大臣高明公

高明公西宮左大臣御事 御事儀の書 古礼とのせり 仁和寺書目 西宮抄四卷 八卷 十卷 十一卷 十二卷 大納言公任

此書白一條院以来の儀式なり 此書ハ一院院以来の儀式なり 此書ハ一院院以来の儀式なり

第一卷 第二卷 年中要抄上下

第三卷 第四卷 拾遺雜抄上下

第五卷 讓位即位間の事 第六卷 大嘗會仁王會等事

第七卷 都省雜事 第八卷 大將儀

第九卷 羽林要抄 第十卷 吏都指南

第十一卷 雜儀 〇奥書之承保三年備小一條本七月晦日書始八

江家次第

二十一卷十九本 大江匡房

月四日午書了、同五日拾定貫二枚了、
年中恒例臨時の政事大小の儀式等概つぎの記せり、
「卷の今の刊かハ第十六の巻脱漏せり、
第十七の巻ハ二卷と
第十八の巻ハ二卷と、
第十九の巻ハ二卷と、
第二十の巻ハ二卷と、
第二十一の巻ハ二卷と、
此書ハ二条院白河通公の令、
依りて、
漢の達、
書と、
今刊中の目録と、
全

- 第十二 神事
- 第十三 佛事
- 第十 十二月
- 第九 九月十月
- 第七 五月六月
- 第六 二月四月
- 第五 二月
- 第四 七月八月
- 第三 二月三月四月
- 第二 二月
- 第一 二月

第十四十五 踐祚上下

第十六 行幸

- 第十七 御元服 御書始、立后、立太子 東宮御春袴 同御元服
- 同御灯事 同御書始、當代親王、宣旨
- 第十八 勅書 詔書覆奏 改元 陣申文 陣覽内文 同次位記讀
- 陣定 軒廊御下 外記改 官結改 廳覽内文 參結諸印
- 第十九 弓場殿 殿上躰子 臨時、競馬 御覽陸奥、交易、御馬
- 院鎮魂祭 御幸 御賀 一院、雜事
- 第二十 関白、四方拜 賀茂詣 勸学院、歩 太政官、賀執柄、等儀
- 任太政大臣 任大臣 新任大臣、饗 大將、饗 一人子元服 同書始
- 諸家子、元服 執事、帥、君、大貳、赴任 路頭、礼節
- 第二十一 御齋會 御國忌 御錫紵 諒闇、御幸 同政始
- 院宮寺、崩奏、違令儀 皇后、朋 女御、贈位 復任、流人

○桃華葉葉之西宮抄者、
礼之北山抄、二條院以来、
儀式也、
江次第、
延久以、
礼儀也、
但有、
誤、
木北山抄者、
為、
證、
書、
之、
由、
知、
足、
院、
殿、
仰

迷蒙畢此上下卷咸得簡要也依為一本不顧短毫令書寫早

寬永五年四月下旬大内記菅原朝臣為適

卷下 叙位入眼式 手文調樣事 五次第樣

奕書之本此抄本落一身之蒙所書抄之也抑所引載之舊記備

忘記江記西宮九抄愚昧記北山等者世所知之也此外於東府

抄者東山左府之抄也予号東府抄也柱史抄者南家儒友系孝

範之抄之薩戒記者中山霜臺之記也又吉續記同為所人之

知不違毛筆而已 明應七年春三月日 菅原和長判

傳宣草 寫本 三卷

口宣は昔筆の草案なり 卷中 内記部 卷下 下辨部

拾芥抄 附撰官雜事 六卷 左大臣實應公

此書ハ山階左大臣實雄公の九代の孫東山左大臣實應公の他は

て種々れり以類抄のちのせり毎巻に目錄抄を考閱し

しに實應公ハ慈照院義政公の孫なり博識の才なり

抄に拾芥の字ハ源順和名鈔の序に思拾芥者好探義實期

折桂者競採文花なり了ふより採りてのなり

上本 歳時 歳運 十二律 廿四氣 物忌ホのりし經史

文筆のりし

上末 本朝世系年立 日本紀以下目錄 和歌 催馬樂

樂器 天竺唐土路の貝鼓の類

中本 百官位階姓尸の類

中末 女官位 公卿濫觴 年中行事 諸名所 國郡

下本 諸社 神事 七高山 三関 大橋 諸寺 服紀等

下末 觸穢 錢文 薰物方 室貨 五色 飲食 方角

諸事吉凶養生の類

簾中抄 寫本 二卷

正月より十二月まで諸社祭礼神馬居饗の事とあり一頁に臨時の儀ども何の事其中は建久九年元暦元年安永二年貞應三年の事の記すれはまことあり一頁にあり一作者の記すれは

建武年中行事 写本 三卷

一名假名年中行事の契あり此年中行事の者後醍醐院制作也彼宸筆の本魚銘只被号御秘抄然而暫所加外斐也予元来所持本為校合申出大覚寺殿御本云文重加清書應永三年季夏上旬 判 此外寛云文明寺の契あり又永正十六年亜相守光の契あり○壺井鶴翁校正判中の契あり此秘抄係准后親房入及法とあり中代中法とあり大槪は建武の契あり寛云才五層魚射中旬候花押○鶴翁の契あり後醍醐帝の制作して建武のは同帝復位の北畠一位准后入及論令知事とあり修撰す官府の故に採諸曹の送例と據八月舎と審察一古今の契ありして書成りぬ字とありの契あり

建武年中行事略解 五卷 谷村光義

此の略解は漢字と附しはちの諸書は引くは釈とあり圖はありとあり○各村光義ハ石清水の社士とあり壺井義知の契あり義知の序あり享保十七年四月上本す

禁裏年中行事 写本 一卷

近代の年中行事なり元永四年の契あり

日中行事 写本 一卷

後醍醐帝の御製なり假名年中行事の契あり一名禁省日中行事の号す早知の契あり後醍醐の御製なり夜の御名の事油の事とあり林の事とあり大永七年の契あり信友資玄の契あり

大槐秘抄 写本 一卷 九條伊通公

年中行事等の後式の時帝王の序んはるをせたりとあり

九條大相國伊通公二條院へ献せしめし意見のち
かり書きたりし

抄りしものなりしと云ふは
奥書より右之一冊芝山勘解由次官廣重の書と以て書寫し且
技合の遂年ぬえ録五の二月日左中ね公詔

禁掖秘抄 写本 一卷

紫宸殿清涼殿意盤不等の圖なりしをり書きたりし
年霜月廿七日右少辨より

名目鈔 一卷

一名林下裏仙洞小名目し号す 恒例諸公事篇 同臨時篇
私儀篇 諸公事言説篇 禁中所と名篇 人體篇
院中篇 雜物篇 衣服篇 喪服篇 車具篇
文書篇ホリ部内より名目の
附すの奥書より右一冊不慮披見之間卒寫之東山左府実

自筆也件本草本款或有篇目不載其子細或翻轉之所
鈎引之大略如本字之少又加今案重訂書損之處く漏之
止郊見可練習而已 于時明應第九季秋望後一日 右山科
亞槐言繼以自筆本清濁朱点等一校了

制度通 十三卷 伊藤長胤

本朝の制度多くハ漢土よりと云ふハ一編ハ和侍の儀を細引
てこれに併せしめしハ一編ハ一統よりなりし

- 卷一 元年改元の事 正朔三統の事 日星躔度の事 曆法の事
- 卷二 州縣郡國の事 郡縣大小等差の事 内朝外朝并朝會の事
- 卷三 宮殿名稱の事 都邑坊城并皇城宮城門号の事
- 卷四 六官九寺六部八省の事 唐三省本朝太政官の事
- 卷五 官秩位階正後の事 兼行守試の事 切臣号并賜の事

官職四等四分のり 詔勅制詰并位記等のり 冊授勅授等のり
卷五 服章のり 印章のり 俸禄のり 符牌勘合のり
僧尼度牒のり

卷六 進士及身状元之場のり 考課のり

卷七 任子陰補のり 廟制并向架のり 九族五宗五服并本朝

五等親のり 廟号陵号并臣下謚号のり

卷八 古今戸口多寡のり 墾田并稅糧總數のり

田賦并井田租庸調兩稅のり

卷九 田法歩取頃并本朝町段のり 行程里數のり 成丁のり

復除并蠲符のり 旌表のり 常平倉社倉并本朝屯倉公廩田のり

卷十 錢貨のり 尺度のり 斗斛のり 權衡のり

端匹屯絢のり 姓氏のり 名字のり

卷十一 釋奠のり 樂のり 経籍のり 學校のり

卷十二 律令格式のり 兵制并本朝軍團のり

卷十三 五刑のり 十惡并本朝八虐のり 八議并本朝六議のり

議請減贖官當除免のり 大赦常赦曲赦のり 私度越度日度のり

保吉辛限のり 才技長上のり 土功并長功中功短功のり

卷首より享保九年甲辰臘月東涯自序 卷末より寛政八年丙辰十一月

伊藤善詔跋のり

三卷

禁裏惣御圖 御造營の記 紫宸清涼其餘諸殿の圖 昆明池障子圖

荒海障子圖 寛政新造神嘉殿の圖 清涼殿御壺祢名所和歌

御殿廻御繪様等 卷末より賢聖障子名臣冠服考上下二卷附して

負文龜のり 五条家及柴邦彦の勅文あり

御即位假名抄 写本 一卷 一條兼良公

大嘗令のり 承和記のり 承和位のり 承和行幸のり

年二月日後成恩寺禪院 〇又一本より大位重行のり 大宋の屏風

尋常一覽

のりて、十箇條が記す奥書に、此抄二條禪閣御作也重
尋申上条、追書高加之畢、宗祇又八箇條がくく、美とらへ
依種玉老人、嚴命聊顯葉之家風者也、莫故外見矣、文明十一年十二月日
神道長上卜部朝日、供御

後西院御即位記 写本 一卷 二條光平公

明曆二(一)月廿二日御即位の御事、真字、二條関白
平公作進の、奥書、中原康富

永亨二年大嘗會記 写本 一卷
永亨二年十一月十八日、廿二日まで、大嘗會の儀式が記す、其
の御事、奥書、則康富記の、二條良基公

永和大嘗會記 假字、二卷
一名御禮記卷首、永和元年十月廿八日鴨川の御禊の御事、
假字、大嘗會私記 写本 二卷

上卷、貞享四年八月廿三日、九月晦日まで、又十八日、二十日、
の記し、下卷、八月、十月十六日、十七日、兩日の記し、左中将基持の
の御事、卷中の圖り、
元文大祀記 写本 一卷

卷首、大嘗會元文度私記、利見堂門人文會源中、良繼集と
あり、元文二年、十一月、下卯日大嘗會の記が、
此中、心火御飯、陪膳、次第、の御事、作進し、悠記、主基
屏風の歌、大嘗會古代和歌、貞享四年、大嘗會、次第、御事
此次第、攝政の作進し、利見堂、多田義俊、御事

御昇壇記 写本 一卷 多田義俊
目錄 新院御移徒 内裏上棟日時定 安鎮 御痘瘡 御酒湯東
使 新造内裏遷去 内侍所渡御 御移徒東使 新院仙洞御幸始
新院御痘瘡 崩御 中宮御門号定 御受禪 御移徒 勅使
御即位日時定 御即位由奉幣 禮服御覽 御即位 諒園終大被

和書部二

御元服日時定 御元服由奉幣 御元服 後宴 賀表 御即位御元服東使 御能 勅使奉向 改元

此書ハ宝永六年七月一日迄元九月のついでに記録し其間の後次才宣命賀表あり雜りしついでに記録し

北山行幸記

一卷

慶苑院殿隱居のなわらの山庄へ行幸の時の記録なり

永亨行幸記

一卷

普廣院殿の所へ永亨の行幸の記録し

類聚雜要抄

四卷

卷第一 御齒固供御同脇御膳 七種若菜 十五日粥 二月三日餅

五菓 代始御膳 大臣家節供 臨時客饗 大饗 五節殿上饗

卷第二 室礼指圖書 之調度の 屏風室礼指圖書 障子帳指圖書

掃苔の 続紙宮の 銘宮の 席子宮の 重硯宮敷物の

二階并厨子 覆敷等の 屏風袋の 香囊懸所の

舊人口傳の 櫛宮面脂宮の 御袋束の 差圖の

卷第三 調度 理髮具 将衣束 膳所具 舞姬女将衣束

祿法 所境飯 行事所雜具 繪折櫃菓子 雜菓子 大破子

氏食 出火桶 大櫃等の

卷第四 母屋調度 帳の 箱調度の 母屋調度ハ二階厨

子 香壺宮 櫛宮 藥宮 造紙宮 枕宮 香囊 衣架 帳 屏角

鏡 壁代 五尺屏風 二尺几帳 四尺几帳 絛絢端 晝 東京錦茵

高麗端の晝書なり

一の巻に要書なる 新院中が親長つて以て校合記に寛文才十

二季冬十三夜後二位源氏判 一の巻要書なる 右道達院筆の所

なり以て校了 寛文十二残臘廿二夜 四の巻要書なる 右類聚雜要

第四卷元禄十年二月廿五日夕内二階厨子二階棚に所より其お

新調の時より申出彼記より是清閑寺故一位殿所所持にかし

玄一此時四十八歳しるも博識のくは異國二事ハ北朝の光明
院曆應二年かゝる准后の自跋り官職唐名以下一條禪因兼良
公の化しし附録しす跋尾は挑華老人しるは兼良公の別号し
慶長十二年上納大藏大輔中原職忠とめく板行す時舟楫
式部七輔清泉秀賢跋以附す此中職原の追加松入女官以下
其中と禁裏并に軍家よ上まき秀賢ハ濃翠軒の玄孫なり職
忠ハ秀賢の門生ししるも職の名かきしるは職忠法名
率菴中心し稱す率菴秀賢は跋り板行し又中院也足軒のや
可しく多考し同板すしるは或説しるは尊氏後醍醐帝御眼
みよりて吉野へ移ししるは一品親房天皇ノ就きよりて吉野の眞
は閑居せしるは逆様の苦し堪えしるはなは帝道乱し官
位もすしるは新しるはかんのねらひの位まき職ハ體し
官ハ用し俸禄切りしるは威名しるは職ししるは才能しるは
けく官しるは又二階堂信濃しるはく都へのけり職と外記

と相傳しるは関東下向のなはまきしるは秘ししるはこれかきしるは
其は安保氏系しるは相傳しるは今も連續ししるは○壺井公羽の官
職説向各しるは職と相傳ししるは記号も亦は字しるはまきしるは
しるは舊言しるは或ハ明職しるは官位抄しるはこれなはまきしるは
しるは不合しるはのらやまきしるは取謂ハ唐宋の職源しるは
しるは諸官のあげしるはの職掌を載ししるは今ハ職原鈔ハ諸官の職掌
をのせししるは任道の前しるはなせしるはまきしるはののたしるは
のしるは又親房の自己此題号はなはまきしるはののたしるは
しるは既跋文しるは謙辞しるは相傳せしるはまきしるはののたしるは
しるは人證文もかきしるは方役の愚意しるはまきしるはののたしるは
職原抄はまきしるはまきしるは一書はまきしるは○藤夏幹が好
古の鈔ハ職原鈔ハりしるは記号も卷首はなはまきしるは百官の二字しるはの
はく根は増補抄なり官位鈔明職しるは鈔等の名はつけしるは
しるはの記号もまきしるはまきしるは○按ずしるは櫻雲記卷

皇子^ノ赤^ク文^ニ和^シ四^ノ勅^ヲ依^リて^ハ世^ヲ承^ルル^ニ也^シ

公卿補任^ノ字本

百卷^或八十卷

此言卷數一定なりす近來流布の中を神武天皇より仁陽成院の慶
長の^ハ代^ノ大^ニ長^ノ按^テ以^テ白^ク己^ノ下^ニ宰相^ノ位^ヲ以上^ノの^ハは^ハる^ル
の^ハ官^位の^ハ補^任年^月日^ヲ記^スル^ル也^シと^シて^ハ書^キし^テも^ハら^ズ
う^レる^ル也^シと^シて^ハ永^正二^ノの^ハ奥^ノに^ハ目^録を^ハり^テ補^任辨
官^補任^ノ少^納言^補任^外記^補任^史補^任八^省補^任侍^從補^任内^記補^任
監^物補^任后^宮補^任諸^寮補^任諸^司補^任判^司補^任彈^正補^任諸^職
補^任春^宮坊^補任^諸使^補任^檢非^違使^補任^諸衛^補任^受領^補任^諸
藏^入補^任僧^綱補^任又^神祇^官補^任等^ノの^ハ數^十部^ノ也^シ共^ニ卷^數
の外^ニ雲^客補^任の^ハ軍^補任^等の^ハ也^シと^シて^ハ一^次也^シと^シて^ハ
今^年の^ハ三^補任^ノの^ハ五^卷也^シと^シて^ハ真^字序^ノに^ハ作者^ノ
也^シと^シて^ハ初^卷神^武天^皇起^リて^ハ彼^等世^ノハ^爪牙^ノ也^シ

あ^の乃^み臣^連等^ノの^ハ任^カる^ル也^シと^シて^ハ大^白玉^東征^ノに^ハ大^郎
氏^ノの^ハ遠^祖と^シて^ハ臣^命と^シて^ハ諸^虜を^誅す^ル功^ヲ也^シと^シて^ハ
も^ハ官^号が^多し^クの^ハ綏^靖安^寧懿^德孝^昭孝^安孝^靈孝^元
開^化已^上九^代の^ハ時^代に^ハ稱^スる^ル也^シと^シて^ハ崇^神大^白玉^ノの^ハ世^代使^ハれ^ル
道^ノは^平げ^ル也^シと^シて^ハ垂^仁大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハ阿^倍臣^等五^氏の^ハ祖^詔を^奉
連^等の^ハ号^ナり^テす^ル也^シと^シて^ハ大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハ御^祚を^承る^ル也^シと^シて^ハ
大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハめ^ク棟^梁の^ハ臣^武内^宿祚^ト稱^スる^ル也^シと^シて^ハ
五^十一^ノ月^ハ推^是彦^ノの^ハ号^ナり^テす^ル也^シと^シて^ハ白^玉太^子と^シて^ハ武^内
宿^祚が^今一^ノ棟^梁の^ハ也^シと^シて^ハ其^レ成^務天^皇の^ハ世^代に^ハ大^臣武^内
す^の名^ヲ也^シと^シて^ハ其^レ成^務天^皇の^ハ世^代に^ハ大^臣武^内
内^宿祚^ト稱^スる^ル也^シと^シて^ハ大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハ大^臣武^内
いつ^レる^ル也^シと^シて^ハ大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハ大^臣武^内
大^納言^基香^ツ公^卿補^任の^ハ也^シと^シて^ハ大^白玉^ノの^ハ世^代に^ハ大^臣武^内

詳書一覽

和言部二

けしつげく其を河えりよさる世にやうハ委一しりめ友
かうくふりたより一とちりけりあう但一通用のちの省略
へりやこ

南朝公卿補任写本 四卷

吉野皇居の延元二(中)より元中九(中)まで五十六(中)ありけり
の補任ありや

卷之一 後醍醐天皇延元二(中)丁丑 北朝建武四(中) 細註あり
十二月廿二日夜主上密書御花山院第遷幸吉野行宮

延元二年 三年 四年

後村上院上 延元五年 興國元年 興國二年 三年 四年 五年

六年 七年 公平元年 公平二年 三年 四年 五年 六年 七年

卷之二 後村上院下 公平八年より廿二年に至り

卷之三 後龜山院上 公平廿四年 廿五年 建徳元年 建徳二年

三年 文中元年 文中二年 三年 四年 天授元年 天授二年

三年 四年 五年 六年

卷之四 後龜山院下 天授七年 弘和元年 弘和二年 三年

四年 元中元年 元中二年より九(中)に至り 北朝明德三年

卷末 元中九年十月北朝明德より所入洛の時南朝のついでに
洛冬実公等 或下向分國 守親公頭泰心尹良公等 或出家或留山中各

不奉任北朝矣

位署書式 写本 二卷

官位姓名所書列之法あり 位署の和州所載卷末に壺
井義知の位署式を考附す

官職浮説或問 写本 一卷 壺井義知

官職のよきく古来よりいけり了り浮説あり或問あり後
くくあり 卷末に宝永六年初秋蒙彼此之間榎谷より引
用の書二十部あり 勘解由小路詔光卿の跋あり

雜職九毛傳 写本 一卷

和書部二

此抄東山左府兼應公作也○多田義俊曰一条禅窟のらうと云ふ
桃李葉葉の奥は胡曹抄と云ふ装束抄と俗は胡曹抄と云ふハ
非なり唐官儀は元の時鳥曹造衣と云ふ竟の臣下鳥曹衣
の製は胡造と云ふと云ふ普通は胡造と云ふと云ふと云ふ
なりと云ふと胡曹抄と云ふと云ふ何の故もなき胡曹抄と云ふと云ふ
何つらと云ふと云ふと云ふ衣服を製するの云々の名を取て
未抄のむと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

三條将衣束抄写本

一卷

一名伏見院宸翰将衣束抄と云ふ三条家衣服の云々抄と云ふ
冬袍 下襲 半臂 单 赤帷 袖 上袴 赤大口 着袍 袴
直衣 指貫 袴の云々 下袴の云々 帷の云々 直衣抄と云ふ
狩衣等の云々抄と云ふ地は未諸家相違の云々抄と云ふ奥方裏
書三箇條抄のす○此書伏見院宸翰抄以て云々の抄と云ふは
中納言巡房の美と云ふ又寛文七年陽月廿七日黄門侍即安樂

二將衣束抄要抄

二卷

この朱下り○書中は當家と稱すハ三条家
上卷 天子臣下の冠袍下襲と云ふ
下卷 鳥帽子直垂と云ふ
○奥書云此書の故臣相傳と云ふ秘すハそのおしり相傳と云ふ
引用の云々諸抄書の文義ハ故滋野井相傳の時抄と云ふと云ふ
更ハ紅心抄の云々寛政九年十一月抄と云ふと云ふ○此書の文
桃華葉葉三條将衣束抄と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
寛政七年三月刊行す

唯心院将衣束抄写本

一卷

一名将衣束唯心抄抄 禁中將衣束の具 同内々将服の云々

其餘種ノ衣紋 女中の衣 女侍几帳の伎 女官の衣 唐織の圖本
 思借しつて写す者也の概して 本主有る益
 將衣束雜事抄 写本 一卷

淨衣の事 半尻の事 布衣の事 片下襦の事
 衣束の下の事 小袖の事 下襲の事 〇奥書云々 應永六年四月日
 倉家秘記書也 不慮一見 今書写す 元禄十五年壬八月廿五日
 將衣束秘記 写本 一卷

〇上院束帯の具 院中束帯の具 院中巾衣冠 院中巾
 烏帽子直衣 片下束帯 束帯足用の次方 衣冠と申の事
 〇奥書云々 寛文十一年夏吉辰 木俣判 木下格 唐名

雲之上衣紋集 写本 一卷

〇衣束の衣紋の圖 深きおぼくりにとせり 寛文の巾衣冠の
 例とす

四位五位將衣束略抄 写本 一卷
 束帯の具 衣冠の具 狩衣の具 直垂の具 衣紋雜事
 車服制度手記 写本 三卷

源君美野宮定基つゝ 車服の制度其餘故実等抄
 上下二卷 乘車の後 下車の後 冠の事 烏帽子の事 同圖 帽額の
 袖の事 衣束の事 半臂の事 長袖の事 妻の褌の事 玉子の事
 履の事 草履の事 袴の事 袴の事 袴の事
 手廻の事 車の圖 隨身の事 小舎人童の事 井筒の事
 大飢の事 其餘抄の向答あり 〇奥書云々 右一冊因問目聊

汚墨思 手典籍二十餘年今逐段不免推量未知之四字此編
所學淺所書拙且以帚府在近不及清書直早稿口王之尤恥
賢覽速授火中燒令外見 以奥書ハ定其全

附録一卷の向目巻首より新井勘解由向より

郡郷 庄園 所厨 柱 勲位 介 別當 勾當 閑園 寄人

公文 院掌 御厨 別當 預 業主 舍人 君飼 御隨身 所別當

内舎人 番長 近衛 使部 内部 伴部 帳内 資人 健兒

火長 雜色 相撲 最手 助手 被手 押領使 音侍 主目 女 文官

武官 麻呂 萬呂 字 姓氏 以上數十箇條向目の返答あり

○奥書より以上管見の至解案可なり 白も 烏なる趣聊と
介 依 狂 信 用 ひ れ 返 赤 面 人

衣 文 愚 童 訓 字 本 一卷 壺井義知

絳臑 闊臑 衣冠 直衣 小直衣 半尻 狩衣 小直衣 布直衣

直垂 布直垂 俗号 水干 小直衣 布直衣

如木雜色 素襖 退紅 白張 十徳 かのり かのり 下巻末 壺
井義知 誌 之 何 也

將衣束文飾推談抄 字本 一卷 同上

菊花の侍のり 桐竹風扇 桐の侍文のり 青と袍は山鶴山吹

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり 唐のり

將衣束問答 字本 一卷

将衣束の故実不審のゆゑの同答し〇書きたる右一葉者依或人之所望伴心信依之右の秘花者也 主利 入右同答二冊書言

鄙鶴向答

写本

一卷

奥書言右一冊者壹井先す一田舎の山人依尋向答書也予暫借用し書字す然金巾子し因少遠より故改しんし 速水も常又云右の書言すいさかんと予鄙鶴向答と云はるものし金巾子の圖も某の圖ホり

冠帽

辨 写本

一卷

上田光秋

冠帽の故実松諸書も考へて記せり 日本紀推古天皇の朝の冠位十二階孝徳天皇の朝の七色十三階の冠位も亦改て十九階の冠位制しれり天智天皇の約は二十二階の冠位制しれり文武天皇の約は爵位の号位りしめたり文武天皇の時位階の号位制しれり同く冠位の号位り

記初ゆゑ其餘衣服令の記上代巾子の圖 唐冠のゆゑ老掛のゆゑ巾子のゆゑ金巾子のゆゑ烏帽子のゆゑ折烏帽子のゆゑ風折烏帽子のゆゑ折袴の巻末は宝曆十の庚辰

五月上田光秋誌しり上田光秋は多田義俊の

皇太子勳五等臣若系國人參議後之位行入内之兼近江守右
 系若長諸嗣正五位下仍造東大寺長官阿部朝光真徳後五位
 位上仍尾張守長之系若長弟平 後五位上仍大外記兼因幡介
 臣上毛野若長額人等上表 四次に序あり

上本 第一帙 真人三十二氏 第二 左京皇別上
 第三 左京皇別下 第四 右京皇別上
 上中第五 右京皇別下 第六 山城國皇別
 第七 大和國皇別 第八 攝津國皇別
 第九 河内國皇別 第十 和泉國皇別
 中本 第二帙 第十一 左京神別上
 第十二 左京神別中 第十三 左京神別下
 第十四 右京神別上 第十五 右京神別下
 中本第十六 山城國神別 第十七 大和國神別
 第十八 攝津國神別 第十九 河内國神別

下本第二十 和泉國神別 第三帙第二十一 左京諸蕃上
 第二十二 左京諸蕃下 第二十三 右京諸蕃上
 第二十四 右京諸蕃下 第二十五 山城國諸蕃
 第二十六 大和國諸蕃 第二十八 河内國諸蕃
 下本第二十七 攝津國諸蕃 第二十九 未定雜姓
 第三十 卷末又姓氏錄載了四十二姓抄記十列を寛文戊申四月白井
 宗因の跋あり

聖徳太子傳曆 一卷二本 平基親
 一名平氏太子傳より一巻首は平氏撰りて以て之契沖内人
 今并似爾の萬葉緯より中約書籍目錄より聖徳太子傳二巻
 日本紀意實より聖徳太子傳より後四位下仍右中兵衛若長
 師尹飲之佐支瑛保敷より紀中よりして傳曆あり古
 書に傳あり

菅神傳 写本

一卷

菊池武雅

たすのりかた初編に... 菅宗... 菅原の傳... 壬辰二月二十五日... 菅原長親卿

西聖記 写本

一卷

藤原長親卿

西聖記... 菅原長親卿... 菅原長親卿の傳... 菅原長親卿の傳... 菅原長親卿の傳

明惠上人遺訓

一卷

明惠上人遺訓... 明惠上人遺訓... 明惠上人遺訓

明惠上人傳記

二卷

明惠上人傳記... 明惠上人傳記... 明惠上人傳記

親鸞聖人傳繪

二卷

覚如上人

上卷八段 下卷七段... 親鸞聖人傳繪... 親鸞聖人傳繪... 親鸞聖人傳繪

元亨釋書和解 二十三卷 惠空

本書は假字を以てし洛東比丘惠空元和三の閑板より異
ちる元禄と申す唐午刻のものとす

扶桑禅林僧宝傳 十卷 高泉和尚

元亨釋書以て禅林の名僧百十七人の傳し延宝とのし和泉
藥のよりの代化し序文は禅外名僧傳十卷者計二十卷といふ
も印がしるは 延宝中は東渡諸祖傳二卷は著し後十卷
の末に附し唐の義空より隱元よりとす十六人の傳し

東國高僧傳 十卷 同上

教家名僧のゆかり智積院前僧正運敬の序あり

日本天台先德記 一卷 定珍

台教相傳名僧のゆかり天正の常州小野逢善寺學法定
珍の傳し

日本曹洞列祖行業記 一卷 融懶禪師

列祖の次第は道元 懷奘 義介 義尹 義尹はひまの自まつて
肥後曹洞の始祖は長光のゆかり道号は寒巖とす
勅撰作者部類 写本 三卷

古今集より新十載集より作者の官位世系は
るまの集よりすねはあけり

卷之上 大納言 中納言 参議 散二三位 諸王 四位

卷之中 五位 六位 僧正 法印 僧都 法眼 律師

卷之下 九僧上 入道 九僧下 女院 后宮 准后 内親王 女御 御息所

更衣 一三位 尚侍 女王 庶女上下 不知官位 神明

佛陀 化人 作者異儀

書中より今より所撰集の者字
一 古今集 古 二 後撰集 異 三 拾遺集 拾
四 後拾遺集 後 五 金葉集 金 六 訥花集 初

七千載集 十
 八新古今集 新
 九新勅撰集 勅
 十續後撰集 續
 十一續古今集 今
 十二續拾遺集 遺
 十三新後撰集 才
 十四玉葉集 玉
 十五續千載集 才
 十六續後拾遺集 系
 十七風雅集 風
 十八新千載集 新千
 十九新勅撰集 勅
 二十續拾遺集 遺
 二十一續後撰集 才
 二十二玉葉集 玉
 二十三續千載集 才
 二十四續後拾遺集 系
 二十五風雅集 風
 二十六新千載集 新千
 二十七新勅撰集 勅
 二十八續拾遺集 遺
 二十九續後撰集 才
 三十玉葉集 玉
 三十一續千載集 才
 三十二續後拾遺集 系
 三十三風雅集 風
 三十四新千載集 新千
 三十五新勅撰集 勅
 三十六續拾遺集 遺
 三十七續後撰集 才
 三十八玉葉集 玉
 三十九續千載集 才
 四十續後拾遺集 系
 四十一風雅集 風
 四十二新千載集 新千
 四十三新勅撰集 勅
 四十四續拾遺集 遺
 四十五續後撰集 才
 四十六玉葉集 玉
 四十七續千載集 才
 四十八續後拾遺集 系
 四十九風雅集 風
 五十新千載集 新千

續作者部類 寫本 二卷

新拾遺新拾遺新古今集の作者の所す
 上卷 帝 以教之身載之 右帝之教自古今至新千載十八
 代集内載之既見作者部類舊之故今唯記新拾遺新拾
 遺新古今之代集所載之歌數而其系譜等略之親王以下
 和歌所舊生光之

諸卿比自倣之
 親王 執政 大臣 大納言 中納言 參議 散二三位
 諸王 四位 五位以下
 下卷 僧正 法印 僧都 法眼 律師 法橋 凡僧
 女院 后宮 内親王 女御 女二三位 女王 庶女 不知官位
 神明 佛陀 化人

傳歌作者部類自古今集至新千載拾遺者建武四年元
 盛光之編輯其後康安二年元之增補風雅新千載二集併
 三卷以行於世余今考新拾遺新拾遺新古今之部而倣
 本篇目悉舉其作者於拾遺以下初見者詳記其官位世系歌
 而其既見於日本唯記一部取載之歌數而已遂集為二卷以附
 本之於此二十一代集全備焉然或下官或卑位或凡僧或女子等
 跡勸出者姑闕之以俟再按且有同時同諱者又有記其家号
 而不記姓名者今尋其始末其以考書之唯恐有牽合

群書一覽 和書部二

第七卷より第十卷まで、雑類要集抄に代るものあり
卷末より天正十九年梵唄の巻あり

大系圖

三十卷 西道智

卷首より新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類より此書ハ明暦年中京の西氏道智集編す人見氏の茲に河内公定の子卑分脈よりいづれ諸家ハ系圖ハ諸侯す侍子の誤を復のふり
心加りし考案す

源平系圖

一卷

源氏ハ清和天皇より當代まで平氏ハ桓武天皇より東大夫胤頼までの系圖のせり編者つやびりあり

藤原系圖

一卷

藤原氏代りて系圖の吉田素房の他あり

武家系圖

二卷

卷首より本朝武家大系圖あり

上巻

國常立より神武天皇まで 清和源氏系圖

源家 斯波 澁川 石堂 一色 加子 石橋等の系圖

源家 新田系圖 源家小笠原南部系圖 其餘源家系圖ハ

平家 清盛系圖 其餘平家系圖等

下巻 藤原氏系圖 橘氏系圖 小野氏 在原氏 清原氏

紀氏 大中臣氏 ト部氏 菅原氏 大江氏 安房氏 和氣氏

中原氏 小槻氏 丹波氏 賀茂氏等の系圖

本朝武家評林大系圖 五卷

卷之一 清和源氏 卷之二 平家

卷之三 宇多源氏 卷之四 藤原氏

卷之五 源家足利將軍系圖

此書ハ武家評林ハ附註あり

將軍家譜

七卷 林道春

京都鎌倉の將軍より織田信長豊臣秀吉のついでに世系と

日本古今人物志

七卷

宇都宮由的

百八代後陽成院より百十四代東山院まで天子親王法親王皇王子皇女等の序連系撰述し降誕受禪即位行幸御幸遷幸山崩薨登下立協薙漆得度轉任配流歸洛等の年月日附し注すの藝文は此連雲之録一冊墨附五十六丁者橋本中將實松朝臣以本字定令校合者也元禄十五年閏八月五日と云

- 卷一 武将傳
- 卷二 亡將傳 南將傳 名家傳
- 卷三 忠臣傳 逆臣傳 姦凶傳
- 卷四 義士傳 勇士傳
- 卷五 儒林傳 医林傳
- 卷六 列女傳
- 卷七 藝流傳

諸家人物志

二卷 一本 池永豹

上巻 儒家 医家 下巻 歌学 國学 書画

補遺十二人

作者南山道人とらう池永豹の寓名なり人々は小傳と名著述の書目はりしをせり寛政壬子年秋刊行同庚申年皆川急再校してせり

本朝隱史

二卷 林春徳

本朝の隱史の士五十二人の序諸書は涉獵し記せり野間三竹の序あり

扶桑隱逸傳

三卷 沙門元政

上古役小角猿丸大夫等より近世宗祇牡丹花等より隠逸高德の人七十五人をのせり毎人の序あり圖はりしを次々贊叙附し引用の書八十八部を挙り元政の自序草山沙門不可思議撰と云けり

字書類

倭名類聚鈔

二十卷十本 源順

天地 歲時 鬼神 人倫 形體 術藝 職官 國郡 居處 船車
 牛馬 宝貨 香藥 燈火 布帛 裝束 調度 飲食 稻穀 菓蔬
 羽族 毛群 鱗介 虫豸 草木 等の部 倭名類聚
 何志... 文字の出處を辨色し成 楊氏漢語抄 倭名本草 日本
 紀私記其餘數十部のもを引く... 考へて... 序中よ
 延長第四公主の教令... 修選... 上天地
 部... 中人物... 下草木... 二十卷... 成巻中よ
 部... 中よ... 門... 四十部二百六十八門... 或人の後
 第四公主ハ慶子内親王... 大日本史ハ勤子内親王
 の... 和名鈔二十卷... 著... 林道春の序よ
 日倭名詳畧の二... 今新刊... の... 詳...

群書一覽

和書部二

七十七

下学而上達すしりし語以て其の題号とす支安元年東
麓破衲自序は其の序中より童子教實語教庭訓往來雜筆
往來書のり也

真草下学集

二卷

本文の右より草字なりいし和訓は附し童蒙より
よすしりし語子の跋より寛文六の刊行す

増補下学集

六卷

山脇道圓

寛文己酉の歳山脇道重自序より増補の旨趣はのり

節用集

写本

二卷

林宗二

節用の二字ハ論語学而篇より日用の字はいろはより
のく天地門 時候門 人倫門 人名門 官名門 文體門 財宝
門 食服門 草木門 畜類門 光彩門 言語門 數量門 寺の
寺二門 然るく真字と以てこれなりしは注釋とくし終
京の横小路九陌の名 壹貳叁肆より百千萬億より

并は十十二支十二律

点畫小字

此書作者のり

或ハ東福寺の虎彫よりいりしハ舟橋環翠軒より後り也
あしづいれハ南都の饅頭屋林宗二が作し本朝書目録より之
たり宗二実名林逸とより宋の林和靖ははかりしハ牡丹の
宵柏より保氏和信ははかりし林逸抄五十四巻はりしとせり又古今
集の奈良傳授よりいりし人のけあし今節用集の古本ハ饅頭屋と
稱すより藏す所の古字が巻末ハ明應五年五月二日とありし
花押あり○按ずるハ林逸と林和靖ははかりしはりしハ
清の褚稼軒ハ堅瓠集より曰ハ林和靖ははかりしハ和靖七世の孫と稱す和靖
が要らざるは己ハ梅聖俞の序中よりいりし善石希詩ははかりしハ
朝よりいりし和靖當年不娶妻因何七世有孫児若非鶴種并梅
種定是瓜皮搭李皮余の通譜亦瓜皮木子皮と搭しりしハ
のりかりしハ○新井白石安海泊は贈り手簡は奥州五十四郡の節
用集よりいりしとありしハ見原好古ハ和事始ハ林逸ハ節用集より

第三卷 片假字 以呂波 梵字 符字 押字 点圖 片假字
釋文 音類假字釋文

第四卷 國字 國訓 借用 誤用 訛字 省字 等のり 假字
やう○此書刊が新井白蛾補校しつゝ其中は菅家の此書門和

語類集史官珍書考りしつゝふらう此書依まがれを補すよ
しつゝ人々用たりしつゝ宝曆十年白蛾序を同年上本す

倭楷 訛字 一卷 太宰純
本朝の俗間又書まはる楷書の点畫はあやまらるもの俗習の倭

集附しつゝふらう倭楷の字をよらるる卷末は省文
と備す○春臺自序 延享戊辰の門人加賀文章跋しつゝ字爲三

年上本のわらひ重刊
漢字和訓 八卷二本 井澤長秀
天文地理 歳時 居處より器用 鳥獸 飲食 等しつゝしつゝ門部

和訓類林 七卷 海北若冲
日本紀 古事記 舊事紀 日本後紀 續日本後紀 續日本紀 釋
日本紀 三代實錄 文徳實錄 古語拾遺 延喜式 和名鈔 万葉
集 日本靈異記 類聚三代格 菅家万葉 真名伊勢物語 御鎮

和訓類林 七卷 海北若冲

日本紀 古事記 舊事紀 日本後紀 續日本後紀 續日本紀 釋

日本紀 三代實錄 文徳實錄 古語拾遺 延喜式 和名鈔 万葉

集 日本靈異記 類聚三代格 菅家万葉 真名伊勢物語 御鎮

和訓類林 七卷 海北若冲

日本紀 古事記 舊事紀 日本後紀 續日本後紀 續日本紀 釋

日本紀 三代實錄 文徳實錄 古語拾遺 延喜式 和名鈔 万葉

和書一覽 和書部二 八十四

和訓 栞前編

十三卷 十葉

谷川士清

座本紀 御鎮座傳記 倭姫命世紀 久餘遊仙窟 易經 詩經 書經 禮記 文選 等故引くはくは河のふりかたありて訓と真字をくちて五十音に以てこれに多てり 卷末は和訓指掌略一卷に附す ○此書の作者若冲ハ卷に拍し号して契沖の門人也

以呂波聲母傳 写本

一卷

多田義俊

以呂波字考録

二卷

僧全長

今乃れわづら取用ししも多しハ書名故著す其餘ハ見聞のしりも臆断せざるべしと云言語活法をわづら簡帳もよき大なるもふてと編し今前編に列し此編もよき古言雅語を解説すしりめくしり ○大綱ハ漢音吳音悉曇方語西土の韻語文章と口語と和字俗字ニ合と合字の朝鮮語支那の倭假字平假字重宝いと成語に訓義訓くればは法濁及諸田舎はゆとゆとゆとゆと今世ははるがの圖五十音聖韻様韻の西土の四声唐音伸詞約詞助語及音轉音はくせ和語の四声等の論せり ○卷首ハ本居宣長序あり

古人今人書きあひ例とほく假字の作らぬ所定めしき
和字大觀抄 二卷 粟門文雄

上卷 無相粟門文雄撰と云々

直音抄音 横堅相生 假字及切 五音相通のやね十條

むねよとすし 以呂波の初目 いろはの作者 いろはの文意

京の字 いろはの字體 和字國字の辨 平假字と片假字 平の類字 真字の類字等のや

下卷 假字のいひかひと作らぬ所 へえと三字のいひや

はとれと字のいひや いろはのいひや いろはのいひや

濁りぬとらすの別 せととの假字 あつひの假字 いろはのいひや

略すし いろはの字 いろはの字 いろはのいひや いろはのいひや

假字 下へぬ假字 濁声のいひ 疊字の式 音の假字 物音の假字

輕重閑合 平上去入 反音 上中下略音 いろはのいひや

特音 いろはのいひや 音連声 いろはのいひや いろはのいひや

外の和字 抄物書 音の假字 役の字

附録 假名合字のはおれりやうの宝曆との四月昔原為範卿序

龍公美 假字序 原助真字の跋 宝曆四年發行寛政七の補刻

古言梯 一卷 輯取魚彦

和字の濫抄はいろはのいひやの考へて いろはのいひやの考へて

いろはのいひやの考へて いろはのいひやの考へて いろはのいひやの考へて

日本後紀 延喜式 万葉 抄物字鏡 和名鈔 いろはの外古のいひや

日中紀 竟寧歌 三代実録 古今集 風土記 文徳実録 いろはのいひや

往来類

明衡往来

三卷

藤原明衡

一吉明衡消息又雲州往来と号す正月より十二月まで此消息又
 上啓案内の事 諸儀札の事 諸恩章事 三日會の事 等春の文
 より冬に文に至り又正月元日言上の文より十二月上旬の文より人
 の名ハ前丹波も栲 散位高階朝臣 大子助藤原の事なり其
 中仲春の文の事 勘解由次官藤原明衡の事なり此名は
 せり ○此書は雲州往来と号すハ明衡著述の本朝文粹の
 林道春の序に云 按明衡姓藤原其履歷者勘解由次官兼出雲
 太守也世所稱雲州往来三卷亦其所作而便于通俗也云々
 新猿樂記写本 一卷 同上

群書一覽

和書部二

九十三

一の巻作者考二の巻以下四季文章松四巻より一〇元禄辛巳
の浪義松字永井如瓶大江改純自序阿

十二月往来

一卷

正月より十二月まで往及の書翰は作者のまじりたるす刊名
菅丞相往来十の保四の刊りす

尺素往来

二卷

藤原兼良公

上巻 山朝拜三即會 御所の 聖廟法樂 鷹鳥狩 新茗 諸香

四足二足 調味 名物 圍碁將碁 賀茂祭 桂里鶴師 祇園御奉

馬ろ 甲冑 鍛冶 勅撰 手紙 書籍 蹴鞠 犬追物 舞樂

神樂

下巻 神訴 藥種 地震 秘法御祈 如領 相論 九重名 成敗

武官 僧官 廿二社 四箇大寺 八宗 佛說法次第 三國五山 七堂

會下 勅令入院 前栽 山水石 器財 禪録 僧具 名筆掛繪

屏風障子 繪具 諸僧 粥 點心 諸食物 茶子 菓子 布施物

茶毘 忌日 歳暮等の文し〇寛文八年初秋刻〇此書兼良公
著述のハ松下見其公事根元集釋よ古筆屏風付何引くこ
とをいす

蒙求臂鷹鳥往来 写本

一卷

松田宗太

庭刊付ありて鷹鳥の故実松十二月の消息より引く

事 狩狩衣本のり 列列方方のり 扇扇を足居をのり 足居は

のり 養雞鳥のり 呼声のり 足緒草のり 甲州のり 信法

のり 越後鳥のり 伊与鶏のり 小初物真りのり 鷄鶺か治療のり

諸病要薬全法代のり 大浮薬小浮薬青浮薬白浮薬野出青

薬のり 鷹鳥の書のり 其餘種々ありてのり 名目等々ありて

ついでにありてのり 〇奥書より松田宗太ハ明應之甲寅年也

永禄二己未の死去に十六年也其身之息女阿之書之者也

新撰類聚往来

三卷

丹峰和尚

群書一覽

九十六

法帖類

本朝名公墨寶

三卷

卷之上

嵯峨天皇

弘法大師

木工頭道風朝臣

參議佐理卿

權大納言行成卿

左京大夫定實

世尊寺修理大夫行能

卷之中

伏見院

依伏見院尊田親王

王の親王 王の親王 王の親王

卷之下

八幡山惺公

○卷末に編者漢字の跋あり

姓名

とんすゝれふけいふんまゝに本邦に下りし者すれども一日に
極究し臨摸鑄刻すもの若干人若十帖に似ハ行草ありハ
假名惟帳成す急廣蒐博采の遺憾なきものあり
然るも里室宝の嗜好淳化の遺意ありしに保る中秋日

群書一覽

和書部二

九十六

卷之十九 永字七十二勢之法 秘傳内閣中書字法 結構二百十八字法

卷之二十 篆法奇字異形偏奇 隸法點畫 王羲之筆勢論十章

真書密論 行書密論 草書密論 本朝新意點畫

集古法帖 五帖

第一帖 醒醐天白王御書 敵國降伏の四文字縮本筑前箱崎八幡宮樓門の

孝謙天白王御書 唐招提寺同上

嵯峨天白王御書 哭澄上人詩草書十四行

後宇多天白王御書 賜東寺勅書行草十行

光明后佛足石碑 楷字六行

舍人親王藥師寺塔露盤銘 楷字十二行

惠美押勝楷書 十八行封東大寺勅書

第二帖 空海行書 十五行尺牘

僧心遍昭書 又牘七行 同 草書十三行

同 楷書十三行 同 草書中字二十九字

第三帖 橘逸勢書 山科寺香燈料奉納狀行書五十一行天長十年九月廿日

菅神君楷書 十二行大安寺縁起

藤佐理書 行書詩十二行樂府草書十二行入牘草書四行

藤行成書 草書二十行

第四帖 小野道風書 草書詩十行

同 草書八行 同 草書十一行

同 草書十二行 同 草書十二行

同 行書詩九行 同 行書十一行

群書一覽 和書部二

和書部二

て本質は交し紫緑二色相交り同少く銅金のと露ハ寸
蓋身も口徑八寸涼さ各四寸余其器親見其銘は手
掲一々家塾は刻しこれに不朽の傳しめん希宝せり墓誌の文
國史の闕を補ふべきや少納言令以前ハ小の字は書せり
此誌銘もくぬ威奈の姓は氏録は為奈真人とらう國史は章那
猪名と記す皆音よりく字の異りも意にづかす檜前五百
野宮八宣は天皇なり國史は檜隈廬入野宮は作れり前の為奈
同のなり後固本ハ齊明天皇なり紫冠ハ孝德天皇改制七色十
三階の中其之は紫冠より今ハ仁は當り後清原國史は淨
御原は作天武天皇なり勢廣肆勤廣肆直廣肆とも同帝古
年更改位階の名しるけり日本紀天武紀よりしるなり藤原聖
朝ハ持統天皇なり威奈卿此朝ハ小納言に任すり國史
ハ所見なり大村の名續日本紀文武天皇大宝三年慶雲三年而慶
所見ハ越後國に任すり墓誌ハ慶雲二年十一月なり國史ハ

三年閏五月なり隔此天の墓誌ハ拜命の年月は録し國史ハ
起任の年月は記せり而平治の年月國史ハ所見なり此銅
器其制唐に似たり或ハ吾邦上古の制未審なり清の徐乾學
が讀禮通考第九十九卷具五石函上金負石志と引く應州馬神祠
前施食其室石刻八卦於旁又書二十八宿字上有篆文曰唐故汾
州刺史朱邪府君墓誌銘蓋汾陰之俗死焚其骨盛以石函此其
蓋也此語其器金石方圓の異はとも火葬の骨を藏せり蓋の
蓋は誌銘に刻せり按てて其餘形似の墓なり慶雲四年
明和七年より至り十四年 明和庚寅秋八月 浪羊木孔恭驗出
安幾破起帖 一帖

小野道風の假字なり和歌二十二首のり脱文十六字衍文二字あり
奥の教は句が脱せり○大明しは秋中并積善漢字の脱り帖の真か
府下清光備院は藏す相傳ふ小野内藏頭道風の書なり明徴なり
とて華法の妙高く二上は攀卓絶倫なり舊傳蓋謬らなり

群書一覽

和書部二

百

行歳去社友長者院に就く摹榻するが用心として周密にして幾毫
差たり一遂に鑄一以てこれに布今松距くして一紀中間改
て鑄版故に熟惜するものなり乃者篆工虚舟舊雙鈎阿請くふ
よひ不朽松園に刻就くこれに覽して精巧實に加すことらう
○天明五年十月初川虚舟家刻す

之蕨院関白臨定家御書 一帖

寛政中江都井上慶寿藏刻す定家自筆のこれいひのきか
近信関白信尹公の臨書一帖了のし○卷首に書始草子事大
嫌文字より又諸之音を尾之百れえ枝へあひわい事
らう又假名字もいふ書歌の草子付と符のなり
これより○卷末に二条中将為衡の札 実相院准后義運大僧心道
院實隆公寺の奥書あり又之蕨院殿奥書あり此一卷は尾出雲守
所持也閑覽多幸之餘令書写畢 信尹○按すは行可のこれ
いひ親のいふと定家公のこれ一をり定家より

海陽泉帖

二帖

糸議佐理卿の行草あり 海陽泉 曲石息 望遠亭 石上閣 同前
海陽湖 同前 同前 夕陽洞 清泉銘 遊海門峽 半の紙あり

撫子合

一帖

筆者詳なりこれ一接八行 東三条院七月七日皇太后宮に
あはせられたる

道澄寺鐘銘

一帖

此帖ハ左板なり小野道風乃楷書一浪華の三宅正誼模写し
刻すこれ本也又寺傍に請く手撮すものなり○城州
道澄寺ハ鐘今ハ大和國宇治郡栄山寺にあり○集古十種に曰
凡鐘銘道澄寺神護寺鐘銘及南圓堂銅燈臺銘尤為珠絶を皆
以教本校合之

神護寺鐘銘

一帖

藤原敏行乃書なり橘廣相の文菅原是善の銘なり以て世に三絶と稱せり

長谷寺縁起

一帖

菅原道真公の行書なり○卷首は吾遣唐大使中納言從二位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真云々卷末は寛平八年二月十日都維那僧行空寺主法師惠義上座法師圓詮別當傳燈大法師位智照俗別當左大臣從二位藤原朝臣良世等の名も又壬生忌寸望材紀朝臣長谷雄藤原朝臣時平等の名もて執筆遣唐大使中納言從三位兼行左大辨東宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真と云々○此帖乃跋云々右長谷寺縁起者為菅公真蹟中無比之觀矣世藏公之手跡者多是斷簡片紙而與此有官銜姓諱者非同日之論也此卷及大安寺縁起特可觀其真跡之妙而已予家藏模本有年于此矣以人間所見希思

大安寺縁起

一帖

其傳不善故合刻以垂不朽云

井上清風刻

菅原道真公乃真蹟模刻す長谷寺縁起帖の跋云々○依蓋縁起并流記資財帳写本と流布す卷末は天平廿年六月十七日大僧都法師行信并佐官僧五人の眞書なり

行書心經

一帖

弘法大師の眞蹟行書の心經全文なり每行各四字

琵琶引

一帖

世尊寺左京大夫四位下伊勢朝臣の行草なり每行或八九字十字或八十字十二字一接八行なり模刻の際誤て脱すところ一行は卷尾に補刻す

藥師寺塔銘

一帖

和州藥師寺の塔銘楷行十二行一して其文は維清原宮字天皇即位八年と云々○寛政し卯九月日下部宿禰勝自本漢文の

跋云近世藥師寺塔銘の刻數本有り然も其の精巧幾盡敬贈自王の風
標神韻と窺ふは是れより手抄輪池氏に假て影写し以て
梓は壽一及び釋文が作くるけり一は附して以て家塾に藏す

大應國師塔銘 一帖

尾張國中島郡妙興寺に在る塔銘は○建長寺の大應國師諱ハ紹明
字南浦駿州安部縣の人也○隸額云 勅謚圓通大應國師塔銘以上十
字六行書日字○塔銘のくめり 大日本國東道相州巨福山延長興國
禪寺勅謚圓通大應國師塔銘有序 杭州路中天竺大曆萬寺水祿
禪寺住持延俊撰 慶元路金鷄山真相禪寺住持沙門釋密詣書
資善大夫江浙等處行中書省左承周伯琦篆○模刻本漢文の跋
云大應國師の塔銘本州中島郡妙興寺に在者蓋元人の刻すといふな
るがゆゑに没すといふ其徒走て碑銘と元朝の賢豪を乞ふ三つは海
に航しこれを得くはしりて去年余源子聞と往く師の塔を

ナれをち合掌讚歎して曰四絶の觀ニかく亦とがり佛教學ぶとのハ
法燈のささきと仰ぎ文好むじこのハ銘字の美と玩ひ士君子ハそれ
ち外國の人の我大邦に欽すといふを愛す其これらもの總て是師徳
に商隱禪師に謀り模刻し布施す 寛政己未 尾張秦島識
源達書 中島淑刻

多賀城碑 一帖

奥州宮城郡の臺のりし模刻數本有り○伊藤長胤の輔軒小録に曰中
季より金石の究めく古きハ周の昆川に沈み秦の臺夷に没し石鼓の
文嶧山の碑後世に傳ふ其文字の彷彿なりといはし木朝して碑碣
のきくめく古きハ奥州臺碑といはし昔頼朝公乃和歌詠せし
因て人々記憶すといはし其時より世に故事と成く古今の間に
名をさし其碑自然石に其背馬鬣の如く高さ六尺五寸濶さ
三尺一寸其中に界あり其界の堅三尺八寸五分横二尺六寸奥州宮城
郡市川村の北岡にあり上代に多賀城といふ城地の舊蹟し其時の事し

かり筆者何人か。近世陸奥風土記に「人のあく二雲
 真人」云々の筆跡あり。水戸の儒官考に「前時國主より儒官と
 遺」云々の字あり。依り今世上は本筆多し。僧顯昭の説は重
 碑に「昔田村將軍東征の日らの輝如くこれ其書す」と謬傳
 或は此表の文より「神龜の背」云々の語あり。○大野東人云
 紀職大夫直廣肆果安子より神龜三年征夷後征戰四と書
 後四位勳四等授り。天平三年陸奥按察使となり鎮守將軍と
 兼後官の累く参議大春徳守征西將軍となり後三位に至り十四
 年薨じたり。此碑神龜元年は按察使鎮守後四位乃官が書す。碑
 文の時より「依り書す」云々の語あり。○藤原朝獨
 考議の罷臣大師惠美朝臣押勝の子なり。天平宝字四年は陸奥の按
 察使となり鎮守將軍の兼後四位授り。五年は仁部卿となり今の
 民部卿なり。六年十一月東海東山節度使となり十二月は参議となり其
 歴官の次第續日本紀に「つよし」云々の碑記あり。相違なり。

頼朝卿の和歌新古今集雜下は「前大僧正慈圓のつよし」云々の
 右大将頼朝

九品文

一帖

城州宇治平等院鳳凰堂の鐘の書す。上品上生上品中生上品
 下生中品。平等の九品乃の篆刻す。帖の末は漢字の致あり。宇
 治の平等院は鳳凰堂に堂の扉の上は安春九品の文が書す。相傳
 小源の左府俊房の書す。墨痕隠然。古色燦然。其筆格の
 顔柳に比す。多し。譲らす。蓋此院や舊。弘仁帝の子河原公乃別
 業なり。後御堂の関白藤公の存たり。其息頼通継ぐ。これ其
 これ其宇治の関白と稱す。永承中其弟が表し。寺に「平等
 院」號し。今其距り。七百四十餘年源左府ハナレ。御堂公の外
 孫なり。意が以これ其推し。此書も。當時より人嗚呼。

乃名刹往々磨刻焚燬す然るは此堂獨全く此書存すや
奇なりやのころ橋本肥州深々遺墨の湮滅すや
刻々以て同志と贈す因て歲月所叙すや
月中浣橋洲源元禎謹誌
寛政戊午春三

伊豆内親王御領文 一帖

橋逸勢の真跡なり ○卷首は菩薩戒弟子後五位下藤原朝臣平
子誓首和南

奉納山階寺東院西堂香燈讀經料事とありて
字はとがり奥は天長十年九月廿一日次より五のりり末

面受遺言 □内親王伊都とありて中より印四とあり ○伊都内

親王は在京業平朝臣の母なり

三十六歌仙 一帖

俊頼朝臣の真跡水府御藏の模本なりとありて
名はとがり歌は各四行なり

源判官櫻樹禁榜

一葉

攝州須磨寺藏すところ武藏坊辨慶の書の模刻なり ○此筆江南
所魚也 明和丙戌冬十二月浪華内山之明漢文の跋より源判官櫻樹
禁榜者武藏坊が署すところありて遺愛より一葉 須磨府下の
書賈村清參擲すところ廣む其典故の如きはすれをら贈矣已
小久しやと判せす

文館詞林

一帖

此書は千卷ありて本朝は傳りてはるる中古より亡びて今傳りては
るは残缺あり 此草率刻ハ橋本肥後守其家より刻すところなり卷首は
文館詞林第六百九十五 令下

中書令太子賓客監修國史弘文館學士上柱國高陽郡開國公臣許敬
宗等奉勅撰

魏武帝收田租令一首

かかれとありて令れは毎り十二字の楷書なり卷末はハ

文館詞林卷第六百九十五

校書殿写 弘仁十四年

かこれ... 文館詞林卷第百冊八

校書殿写 弘仁十四年 歲

次癸卯二月為冷然院書

此二行の中より方印三を押し... 橋本肥州國字の文が畏紙... 文館詞林ハ唐書執文志十卷... 和名類聚抄の序ハ百帙... 門齋然... 國字... 勝福寺... 佐々木春行... 小硯の...

寛政十二年十二月

橋經亮

の二卷ハ佛書... 文中... 佛とハ三宗相對抄... 勸善院鐘銘

一葉

筆者... 楷書四行... 推絶神器... 勸善院ハ大和國

七 德帖

一帖

小野直風朝臣の行草書... 七德舞... 一接各八行廿二接...

那 須國造碑

一帖

下野國那須郡湯津上村の碑... 行書十七行永昌四年己丑四月... 伊藤長胤の輶軒小録... 此碑の事... 州湯津上村... 里民地...

群書一覽

和書部二

卷之五より出く共ニ銅佛光背銘ニ作リ
上宮太子瑪腦石文

楷書四行 今年三月 河内國上太子之藏すところなり
船工後墓誌

楷書八行百六十二字 惟船氏故王後首者
藥師寺塔銘

楷行書十二行 維清原宮 馭宇天皇即位八年
和州藥師寺の塔銘
那須國造碑 此碑の石既上ニ録す

形浦山碑
楷行書六行五十字 飛鳥浄原大朝廷ニ
形浦山ハ河内國ノ所リ

多胡郡碑
楷書六行八十一字 并官符上野國ニ
○此碑の石 輶軒小録ノ日上野國
多古郡本郷村ノ所ニ古碑石ハ古来穂積親王ノ墓碑トイ
ヒ侍ル其上ノ古き樟樹有ク生々々々 碑身半ハ樹ノ下ニ

又近より其碑の委細ハ其碑高サ二尺四寸横二尺厚二尺
八寸五分其下ニ臺ハ上ニ覆石ハ中及下ニ平瓦ノ一ニ尺四
方ニ厚サ六寸碑面ニ記す 并官符上野國片岡郡縁野郡甘良郡
并三郡内三百所成給 ○成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左
中弁心五位下多治比真人大政宣二品穂積親王左大臣心二位石上
右大臣心二位藤原 ○ 依テ續日本紀ハ考テ了ニ 帝和銅四年
三月割上野國甘良郡織裳縣級矢田大家縁野郡武美片岡郡山等
六郷別置多胡郡ト碑ハ蓋々ノ時立々々々此文符節ハ合す
太政官符と名ニ刻ク後世ノ子ナリ 本按ずル慶雲三年二品
穂積親王知太政官事 和銅元年石上磨任左大臣藤原不比等任
右大臣 碑文位置の連名亦之文と符合す 碑文石上藤原の字乃下文
字分明ナリ 上の例を考テ各朝臣の字有ヘテの
元明帝御陵碑
行書七行四十五字 大倭國添上郡ニ 養老五年ニ

上野國山名村碑

行書九行五十一字 辛巳歲集月三日

上野國群馬郡碑

楷書九行百十一字 上野國群馬郡下營

高屋枚人墓誌

行書五行三十五字 故正六位上常陸

下集古十種碑銘都卷之三河内國

紀廣純女古繼氏墓誌

楷書四行四十五字 維延曆三年歲次

卯春日村紀廣純女古繼墓誌

銅燈其墓銘

行書二十八行二百四十七字 銅燈其墓銘

前ノ河内華者橘逸勢なり

楊貴氏墓誌

楷書七行四十三字 後五位上守まゝ○
惠良村よりふは河内二里程東よ八田村
河内二十年をより前八田村より一里
の百姓古さ塚河内鉄器所出の
和銅元年より其器ハ処の地藏院
の社建之の心く地藏院
字餘より中国筋より書つけ
親父なり 享保十三戊申の秋和州
衛門の家より四五升ほど入る重一
枚文字ハ彫つけ朱色入り凡の
尺九寸なり其より後五位上守右衛
藤正此楊貴氏墓天平十一年八月十
一行より此上の墓の碑と同一く
なりこれハ母義なり同一く追

已上十五種 寛政八年歲次丙辰九月摹勒上石
哭澄上人 一葉

永手公墓誌 一葉
墓誌一行四字華者つまじりなり。○集古十種は河内國古市郡

駒谷村金剛輪寺境内永手公墓誌と云々

鎌倉右大臣和歌 一葉

●實朝公の詠草とてむハ冬と恋と二首之花押り已歌合點也
益田池碑銘 一帖

弘法大師の草書なる墨字左枕の刻本は又三國華海全書のものせ
う字體尤奇怪なるものなり集古十種碑銘部卷之七、益田池草
本真點云々

辨慶消息 一葉
假名消息八行 五御器一具云々 十二月十八日 進上智明御房 亦

慶花押り ○吳田吉田氏の藏刻なり

賜珠光口宣 一葉
九行の口宣なり 數寺直傳來云々 右少弁花押 珠光菴休心居士

○野本氏傳來宜春齋所藏
藤原信細懷紙 一葉

和歌一首 詠海邊霧
かきかきとこれ かしらきりあきり けのりうんぬらうか

定家卿消息 一葉
今日隆成云々 奥云々あり

頼朝卿消息 一葉
おのゝの沖祇のころねのこゝろ 今もたゞさやまこゝろのそ

抄政云々 中流にさしゆき 四月十九日 ねの花押
聖一國師消息 一葉
そねのり云々 八月十二日

和書部二

宮才人帖

一帖

契沖何爾梨の草書なり 宮才人樂府妓之 跋尾云々 寛政十二年
庚申三月 六如杜多慈周題 蘭院江成美書 兵田吉田元可老人藏刻

耳比磨利帖

二帖

玉田成章字子達摹勒上石す漢字の自序云々 丙午の冬 役ノ攝
津ノ祇たきく 耳比磨利の作ヲ觀る 實ニ千歳の遺蹟ナリナレ
ち換字ノ一々當頭ニ露出シ 後來觀覽す 一々併セ
く 以てこれ刻す 於此帖ニ標す 一々余ノ幸
上帖 天明丁未仲春攝津長柄の邸舎ニ書す

日本武尊書曰

城州八幡谷邑氏墓所傳

耳比磨利菟玖波

而説得九字

聖德太子書

故作此觀楷書

嵯峨法王門所藏

聖武天皇宸翰

同上

光明皇后真蹟
嵯峨天皇宸翰
大職冠藤公書
吉備公書

南都佛足石所勒摘二首
草深云々
南魚云々
同上

嵯峨法王門所藏
洛陽廣澤氏藏
同上

菅丞相書

兄有履足云々

同上

舍人親王書

江都牛山世龍墓所藏

具平親王書

明人墨帖所載

暮春遊施魚畏寺云々

明人の墨帖と稱す 一々の八玉烟

藤原惠美朝臣書

江都牛山世龍墓所藏

行成卿書

勅 東大寺云々

攝州四天王寺藏

和書部二

百廿一

菅丞相書

古地布衣竹 假名三行

藤原朝臣敏行書 高雄山鐘銘

小野道風書 道澄寺鐘銘

弘法大師書 入唐求法三行

同上 最勝王經切 楷書 有之事以天

佐理卿書 祭之事

橘逸勢書

南都興福寺銅燈臺銘 今年

源賴光朝臣書 丹後國大江山

源攝州所令榜 勅誥

源義家朝臣書 下丹波國

源賴政卿書

兵庫真光寺藏

和州栗山寺藏

嵯峨法王門所藏

同上

同上

同上

河州上太子藏

幸也三行

難波小橋邑神社藏

丹州具氏藏

大坂神田氏藏

嵯峨天龍寺壽寧院藏

歌五首 云云

鎮西八郎為朝書 天魔法

鎌倉殿日記 建久九年三月

源賴朝卿書 播州高砂三浦氏藏

源判官義經書 泉州器尾北村氏藏

同上 姫路總社藏

圓光大師所書於平相國之旗 大坂一心寺藏

文覺上人書 手鑑

俊寛僧都書 歌四首

平相國書 和州郡山光慶寺藏

重科者之依之云云 少将成経康頼法師赦免状

平判官康頼書 京都春日龜氏藏

小松内府書 兵庫來迎寺藏

平内府所命伊都岐島鐘銘

洛陽出雲寺藏

銘の末に施主右大将平宗盛とあり

平能登守書 泉州冲部大塚氏藏

左馬頭行盛書 詠筆奇品和歌

平忠度書 江都浅草某藏

鎌倉殿禁榜梶原景時書

河内國園光寺者云々 河州高安園光寺竹之坊藏

平敦盛書

詠二首和歌 庭雪 寄松祝言 音寿丸と有り 攝州須磨寺藏

熊谷三郎直実所書 於平敦盛懐

武藏坊辨慶書 須磨寺櫻云々 同上

同上 攝州丹生山田鷲尾氏藏

為君云々 長井六郎友 此書消息云々 奥に此宛名あり前の須磨寺極の制札の裏の長井六郎友とあり 名付帖云々

常陸坊海尊書 祈禱二字

大夫坊覚明書 常州福泉寺藏

楷書 夫以八幡大菩薩者云々

朝比奈三郎義秀書 是ねらふ云々 河州高安園光寺竹之坊藏

佐々木三郎盛綱旗所書 攝州四天王寺藏

不害是忠信心云々

梶原平三景時書 八塔寺者云々 備前瀧谷三村氏藏

和泉三郎忠衡所置 奥州松島燈籠銘 奉寄進云々

攝州丹生山田十年家棟札

大同元年云々 丹生山 大工日原

伊勢三郎義盛書 泉州踞尾北村氏藏

滯留休息之間云々

大僧心慈圓書 詠月前薄霧和歌

北条恭時書 奉免地頭新田云々 攝州原田長谷川氏藏

北条時盛 同重時連名文
當國金剛寺云々

河内金剛寺藏

北条時宗書

時宗留意云々

鎌倉圓覺寺藏

北条貞時書

成松保云々

同上

北条高時書

山内地云々

同上

千葉介頼胤書

相模國主云々

同圓覺寺佛日菴藏

江州番場蓮華寺鐘銘

弘安七年十月十七日 勸進玄田生法印

武藏州豐島郡赤塚泉福寺真福寺西寺鐘銘

曆應三年庚辰四月云々

江都太田氏所奉

紀貫之書

月一字

土州井田浦松山寺藏

下総國第一鎮守八幡宮鐘銘

元亨元年辛酉十二月十七日云々

那須國造碑

下野國那須郡湯津里所置

出石

大倭國云々

南都善城寺物

形浦山碑

飛鳥淨原大朝廷云々

河州春日村妙見寺物

枚人碑

故心六位上云々

河州磯長里東福院物

忍海原連真養碑文

虛忌分別云々

南都十輪院物

古備塚

大和國蓮華寺物

後五位上守云々 天平十一年八月十二日記

上野國六カ自碑

上野國云々 神龜三年丙寅二月廿九日

山城國宇治橋銘 至今總存 江都神原氏奉所藏

扶桑略記所載全文四言廿四句

鎌倉新長谷寺鐘銘 文永元年甲子七月十五日

上州多胡碑 弁官府上野國云々

奥州宮城郡市川邑壺碑

宇治橋碑

寛政辛亥夏月一夫たよく放生院の藩籬の側以穿て断碑二尺許
伐獲りこれに驗すれをすれより舊碑四の一の尾張の人小林亮
適内田宣経小川雅宜吉田重英釋惠惠これを得てこれに復
せんと欲す而して碑面文字ささめく醇古一々今人の補綴す
るにけしきありてはけしきありて古法帖中よ就く擬拾布列し
しひ全しえり仍く其文に勒し以て登法河の功德に記す
まゝ寛政癸丑秋九月碑成因く其事に係り以て不朽の壘

尾張中村維禎撰
小林亮適書并督工

下帖

後醍醐天皇宸翰

大塔宮尊雲親王書

洛陽廣澤氏藏

同上

市野可懸御目書

尊圓親王書

保布石瀨野書

嵯峨法王門所藏

同上

改修市野書

同上

同上

後百子書

和州多武峰物

万里小路宣房卿書

播州報恩寺藏

播磨國印南庄書

花園院書

万里小路藤房卿書

攝州四天王寺藏

蒙論言書

正親町院書

當時別當書

同上

北畠源中納言顯家書

伊賀三郎書

新田左中将義貞書

姫路正明寺藏

廳宣書

建武元年四月二日

同上

今度一戦云々

元弘三年五月日

洛陽尾崎氏藏

同上

白布方丈、依之

兵庫喜田風氏藏

楠中將正成書

關東凶徒

河州金剛寺藏

同上

為御祈禱

河州勸心寺藏

楠正行書

復作

同上

楠正儀書

勸心寺住侶

同上

足助次郎重範旗所書

日月

播州須安湯淺氏藏

備後三郎高德書

草書二大字

攝津吳田吉田氏藏

橘氏母書

護與高田御領内私領田事

播磨國多可庄

播州赤松氏藏

足利尊氏書

金陸寺領

鎌倉圓覺寺藏

同上

下多田院

攝州能勢松尾氏藏

足利義詮書

常照 楷書二大字

嵯峨天龍三會院藏

足利義滿書

攝津國澤良宜村

攝津國澤良宜村

足利義持書

攝津國澤良宜村

攝津國澤良宜村

足利義教書

持氏誅伐事

播州赤松氏藏

右兵衛督源持氏書

五大尊

鎌倉寬喜寺明王院藏

足利義視書

歌一首 左もる身

足利義村書

同 名所恋

足利義熙書

同 かす

足利義澄書

同 月足

山名常照書

同 あめ

京極中務大輔源勝秀書

同の道乃

石堂右馬頭書

禁制

攝州多田院藏

自畫三社贊兼好法師書

禁制

江都月溪寺藏

高武藏守師直書

長井縫殿助

姫路那波氏藏

同上

河内國天野山

河州金剛寺藏

大内左京大夫義隆書

河内國天野山

城州横大路村上氏藏

永興寺住持云々

大内左京大夫義興書 南方之儀云々

管領細川晴元書

難波小橋邑神社藏

近日可令書法云々

管領斯波義將書

勸修寺領云々

濃州加納森氏藏

大友修理大夫義鑑書

就法各三郎九未下云々

江都鳥越其藏

管領細川頼之書

地藏院領云々

嵯峨天龍地藏院藏

管領細川勝元書

以青信子收

嵯峨天龍真乘院藏

畠山左衛門督持國書

河州勸心寺藏

被法三美十海云々

二好長慶書

くはぬ云々

攝州西宮藏

二好範長書

不買得云々

兵庫心直氏藏

浮田氏八弥女書

古くあり云々

須磨前田氏藏

宇喜多宰相秀家書

東岸西岸柳云々

金吾中納言秀秋書

古歌一首 かりあり云々

三好越前守書併寄附狀領書本文略摘其花押

あしひくし云々

多田院藏

諏訪信濃守

美濃守

松田左衛門大夫

攝津守

飯尾因

幡守

飯尾越前守并花押

赤松圓心則村書

當寺領云々

播州報恩寺藏

赤松則祐書

攝州有馬

應安の... 園東関西の官軍云々

手... の所とありて... のむら... のむら

赤松参河守時則書

多田院藏

寄進攝津國多田院云々

赤松伊豆守光祐書

播州志方玉田氏藏

恒例茶三拾袋云々

赤松左京大夫義祐書

播州法華山地藏院藏

赤松播磨守滿政書

歌一首一系古歌

赤松右京大夫滿祐書

同 十のり歌

朝倉義賢書

同 獨舟中又

今川修理大夫氏親書

同 詞々々 〇〇〇〇

蒲生智閑書

同 〇〇〇〇

今川某書

同 詠法花經二十八品和歌

嵯川親元書

同 歌一首 和々々々

嵯川親世書

同 〇〇〇〇

嵯川智蘊書

同 本乃系々々

嵯川親孝書

同 夕々々

今川上総介氏真書

同 濃州加納森氏藏

氏家書

後今日々

友系氏元

武田信虎書

浪華好古齋藏

穴山梅雪老

信虎

武田信玄書

嵯峨天龍妙智院藏

内々可々下向々青々

武田勝頼書

御遷宮者々

甲州八幡大宮司藏

上杉謙信書

丸屋園々々々

洛陽祥光寺藏

上杉中納言景勝書

信州文科々々

同上

村上義清書

定 信越堺目々

同上

直江山城守兼継書前後略

江都神原氏藏

一 系信玄書之月日

平信長公書

西院内院領々

嵯峨天龍妙智院藏

瀧川左近書

禁制

須磨前田氏藏

荒木攝津守書

先日神々々

攝州西宮藏

佐久間右衛門督書 西蓮寺住持藏

十河丹波守重存書 泉州家原藏

北条氏政書 京都信長藏

北条左京大夫氏直書 書面趣藏

松永彈正少弼久秀書 大坂内山氏藏

今川上總介範氏書

奉寄進藏 江都鳥越某藏

大和守護筒井順慶書 仙基桑原氏藏

安藝中納言書 江都中井氏藏

小早川隆景書 難波小橋邑神社藏

宇喜田氏書

秀家 館林二村氏藏

增田右衛門尉長盛書 濃州加納氏藏

山内對馬守書

後藤又兵衛書 江都中井氏藏

後藤助右衛門書 姬路芥氏書

堀尾帶刀吉晴書

攝州大道澤田氏藏

黑田如水書 姬路芥氏書

片桐市書 同上

播磨國津和野書

福島左衛門則書 攝州大道澤田氏藏

加藤肥後守清書 大坂加賀屋某藏

降須賀阿波守家政書

大坂阿波氏藏

本多上野介正純書 攝州大道澤田氏藏

仙臺中納言書 桑名桑原氏藏

細川退齋書 姫路明石氏藏

小塚遠州書

行大夫文書

浪華内山氏藏

妙壽院惺宮書

めまらふ書

石川丈山書

わびりな

江都水野氏藏

慈眼大師書

牛膝のうりま

泉州木寺氏藏

一未さき

牛膝のうりま

僧一休書

ケ換るまじ

攝州四天王寺藏

鄭成切書

紅影飄来

長崎濱武氏藏元高元春所

藏二幅之其一

傳附

名八森字大木父之龍字

ハ飛黄小谷

官常

日本よきて婦有娶了成切日本よ長一後七風一之隆武召て

陸見一姓

名朱

賜ひ名成切

梅子

姓

中外國姓

東下野守常録書

芝早

播州高砂井澤氏藏

楠心行書

吉野殿兵糧事

玉田成章藏

○林奈酒の跋二十一行うれあゝろ寛政丁巳後七月念五日 速齋識
杉浦吉統書 附

小野朝臣道風書

二月十九日

源建致

○跋

搜討積年片紙隻字と獲

手摹上石一久之

逐二巨冊

成

上帖總一八十七葉 摸本七十四種 下帖

總計九十四葉

摸本百六種

恩命帖

一帖

參議佐理卿の消息

なり中

思命抄

恩命帖

稱十一梅八行草書百六十餘字

○帖末香果藏の三字

真蹟ハ浪華の賈人某が珍藏

寂澄度牒

一帖

傳教大師入唐の時

天明州より天台山

巡礼將金字妙法蓮花

○此牒の

日本國求法僧寂澄

往天台山

經寺

金字妙法蓮花經一部

外標金字 元量表經一卷

觀音經一卷 己上十卷共一函盛封全取澄稱是日日本國春宮永封未到不詳
 屈十大德疏十卷 本國大德論兩卷 水精念珠十貫 檀會館
 水天菩薩一軀 商一尺 右得僧取澄狀稱物將往天台山供養
 供奉僧取澄 沙弥僧義真 後者丹福成 文書鈔疏及隨身衣
 物等物計貳佰餘斤云々 貞元廿年九月十二日史孫階牒
 付次負元廿二年二月 日日本國僧取澄牒 此後台州の刺史陸淳が草
 書四行 三月一日の印を押し 此後台州の刺史陸淳が草
 七月廿日沙門圓珍が抄す 此後天台延曆寺元初祖師行業記
 祖師諱寂澄字弘藥澄傳教大師と謚す 同年延曆廿
 年九月七日聖主天台教通理諸宗を起す 弘鑑案して時より
 興隆せんと欲したる弘世の物に以て和上と報す和上表は云々
 差して唐の遺一餘教を授け求めんとす 同年十月十二日弘世の物
 詔に少納言大納言入鹿を仰せし和上表を差して入唐の請益を乞

しむたれり 翻表は更の儀從外は沙門義真の賜く求法の
 の譯語す 表文例の云々 九月六日春宮内舎人紅鈴鹿麻呂を差
 しく高雄の法會に隨喜せし善議法師等啓に奉しく陳謝す
 又春宮殿下法花義觀等二本經を繕寫し祖師を附しく天台山下
 送りて永く彼藏に鎮めしとれり 事ハ公驗に及り 十三年秋七月第二
 の船より唐の明州に達す時國号貞元十年なり 船頭徳領
 して京に入和上獨台山はひし山ハ台州より明州に近し 日
 て達し台州の刺史陸淳に遇て天台傳教の大徳道遠和尚松州下の
 龍興寺の淨土院に請し止觀を講し圓教菩薩三種淨戒に和
 尚旋本國の句當に與ふ天台大師傳教の文二百四十卷を
 抄す 次は台嶺に登り禪林寺に於て傳教大徳僧行滿蒙り遇
 教本の法文半紙捨与す 更は山下の國清寺に於て 屈十大徳求法
 譯語乃沙門義真の遺り 事ハ別は載廿一年四月
 台州より廻り明州に至り公驗と請得て越府の龍興寺に至り善

魚畏三藏第三代傳法の弟子内侍奉順阿闍梨又遇て真言天台の教文一百一十五卷抄撰得す前後都く二百五十五卷を得り五月上旬却て明州に至り第二船に載延暦廿四年八月本朝に歸り上奏し請來の法文進奉すす外より詔ありて七大本寺に與へ天台の法文七通何書写せしむる○今此公驗の文行行業記に併せ考ふ其事のたゞをさしめしむるにこれに此撰本ハ浪華兼葭堂の藏刻なり

白詩二首

一帖

神京家藏佐理卿の草書なりと云ふは昭國閑居の墨子ハ抄りたりこれ料紙古代の詩箋と云く四圍に註釈書き中ハ藻間の遊興鳥書墨本に書けり○跋曰右白樂天の昭國閑居及ハ酬吳七見寄の二詩は皆文集第六卷よりなり真蹟舊殘破の餘と輯めく以て奉抄成す詩も錯置多し今をくく叙かすなり井上清風謹刻

國姓爺尺牘

一帖

國姓爺鄭成切水戸の舜水先生に贈るるの尺牘なり草書十五行百九十餘字其書より一別萬里雲外常望東天春意不休森不肖荷光武重興之義不得舍于寢食之間雖然力微勢疲魚黍狼嗷今欲遠憑日本諸國侯假多少兵恭望
台下代本森之諸國侯便是與台下曾謀之處也
台下今微採薇客而莫忘國恩懇々

右 上

舜水同盟朱公大人 床下

愚弟鄭森其音

○按下國姓爺と云ふは名ハ森字ハ大木と云う隆武召て朱姓何のついで名成切と云ふは今舊友の朱舜水に贈る書翰なり是以て舊名と云ふは森と云ふは姓名の上より成切なり朱字の印を押し舜水先生は明の監國魯王の勅諭と云ふは併せ考へ

木下元高の漫筆、其勅諭のせく、予夢寐賢臣求め延佇して
以て、茲に殊に、希勅爾、召而、言旋前、来て、予を、恢復、八事、業、何、佐
く、一、當、爾、節、義、文章、實、資、く、一、幸、色、く、一、何、安、く、
他、邦、に、滯、滞、す、く、一、く、れ、欽、め、特、に、勅、す、く、舜、水、の、奏、疏、を、臣
崇、禎、十、七、年、に、於、て、思、何、業、く、特、に、徵、く、一、次、就、す、れ、く、一、江、西
の、按、察、司、副、使、何、授、ら、せ、兵、部、職、方、清、吏、司、郎、中、と、兼、鎮、臣、方、國、安
軍、監、下、復、拜、せ、す、く、一、之、山、會、稿、を、舜、水、に、稱、く、一、漆、を、
く、一、の、ハ、傳、聞、の、謠、なり、〇、又、云、け、本、朝、明、曆、三、年、なり、朱、子、瑜、字
魯、與、舜、水、の、人、なり、〇、又、云、け、人、朱、舜、水、明、人、何、以、く、宗、禎、帝、國、
殉、節、に、節、を、死、せ、す、く、一、く、日、本、に、出、く、一、何、議、す、と、く、一、此、疏、
を、爲、の、く、一、ハ、す、れ、く、一、魯、く、一、禄、任、せ、す、何、不、此、を、一、人、和、志、陳、宣、中
〇、明、季、遺、聞、に、白、福、王、崇、禎、十、七、年、五、月、初
四、日、以、く、監、國、に、なり、十、五、日、使、即、明、年、乙、酉、弘、光、と、改、元、す、清、の
豫、王、既、に、江、浙、を、定、め、尋、く、北、京、に、歸、り、弘、光、に、授、去、し、酉、張、尙、堂

吳春枝黃道周鄭芝龍唐王何多隆武と改元す
見勅くハ何斬太祖の後より帝位は福州に即時に國六月十五日なり
監國と稱す隆武と改元す何式親永明王何桂王の子なり監國
永略と改元す戊子十月十四日なり丙戌福建舊相獲觀生何吾驍顧
元鏡と土月は於く隆武の弟唐王聿錡と擁立す監國年號紹
武十二月十五日杜永和紹武并は周王益王遼王等皆擒く
盡くこれ何斬し西浙東亦魯藩何奉し監國すこれ
先清兵浙入潞藩城何降く張國維方逢年柯曼卿宋之
晉陳五輝熊汝霖孫嘉績等も魯王何高也迎へて朱大興亦
孫王と遣りて表何上く勸進す魯王紹興は監國より〇此天
膺の真跡兼葭堂主人江田世恭よりこれ何て家塾に撰刻す
とらなり

大江匡範詩

七言律詩の懷紙なり 端作より 夏日同賦在客對泉石各分一字

和書部二

詩探得 己上一行半次は太皇太后宮權大進大江正範の詩六
六行三字の書す第一行第二行九字第三行十字第四行九字第五
行第六行八字第七行三字なりこれすれり詩の懐紙の書法を足
るふりぬかり 葉葭堂藏刻

賣茶公羽詩

一葉

七言絶句一首なり起句より遠見靈苗入大唐より右賣茶吟洛
陽賣茶公羽元昭書す于千佛堂前松下より〇致す右賣茶公羽
の賣茶吟洛の松風主人雙鉤より久々家藏す今茲庚申
の孟夏郷人曾酉山洛遊て主人の遺主人偶此帖出より以て
贈し已より西山携り帰る適余が茶舖を閉くは會因く又余
に授く余喜くすれり梨束より上へ敢く私藏す將に惠顧
乃君子に俟く以て献んすははるるハ四方に余か
す翁の藩遊つて何れせん 檜西堂主人識

頼朝卿消息

一帖

返書二通よりめけりハ二十九行はけりハ十四のりりめけり
よと申消息より前承り東大寺の勢令存疎略哉と伝へ未だ
多の尉高個當き志と運ひぬるやと 九月八日 花押
はのみより八月廿七日と札十月九日と札示給へる具以て了す家達
は相をくゆるは焼大佛之廟壇に祀代に心強催遂誅戮平家之凶賊
まに 己の年十月九日 花押 〇跋より古大人君子切一討は施す其
筆蹟必工拙何論せず率比白道傳自爾一筆の滯澁なり蓋氣魄の
英直より子臍より發すの源肇徳を摹刻すとの頼朝公の二割草
く少く成るの深沈の力人異か處より豈點畫の拘りたり
擬く録しつゝらんや直かりれ書つらんは頼朝公の其
然らずや致く僭評を書し以て還す 杏堂濱世憲
南都古梅園藏刻

願書
三十番歌合

一帖
一帖

平相國書
俊頼朝臣書

和歌二十首	一帖	將軍實朝公書
春江帖	一帖	親王公卿等集書
方袍帖	一帖	弘法大師書
春江帖	一帖	諸名彦集書
詩一首	一葉	佐理卿書
和歌三首	一葉	京極黃門書
和歌七首	一葉	同上
和歌一首	一葉	西園寺實衡公書
和歌一首	一葉	近衛信尹公書
書牘	一葉	黃門正宗卿書
光明遍照中字	一葉	弘法大師書
忍字	一葉	同上
大字	二葉	小野道風書
和文	一葉	西行法師書

詩歌三首 一葉 近衛信尹公書
 兵書 一葉 法眼鬼一書
 達磨函讚 一葉 釋即非書
 書牘 一葉 大石良雄 原元辰書

已上二十種白川忍齋藏板の墨本あり此外は菅公の初瀬寺縁起
 同大安寺縁起 佐理卿の詩二首より三種ハ己の前は奉りて致し
 錦せす又漢人の墨帖十種より二種ハ己の前は奉りて致し
 素書 將軍銘帖 一帖 唐鄭審則書 五柳先生函讚 一葉 趙子昂書
 二大字 一葉 宋岳武穆書 竹函讚 一葉 藤東坡書 詩一首 明陳
 歐章書 又 一脈帖 二帖 何人の書なり
 末は漢字の跋語あり予願ち人の書は癖ありていふも其書なり
 らの成るれど、あつたれは、奉りて近き我、おもたて藏りて
 稍富し而他人の法亦常くあつて來て書名は問ふも、以て

逐一ノ類シトク参シクナククヲ因テ書シ〜月録ノ〜ノ以テ口舌コウゼツノ代ノ〜
 寛政己未季春 白川大池長尾元長 追加 坐右銘 弘法大師書
 二行書 明刈伯温書

